

市川市国府台遺跡第13地点(3)

— 地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書 —

平成23年3月

千葉県県土整備部

財団法人 千葉県教育振興財団

いち かわ こ うの だい
市川市国府台遺跡第13地点 (3)

— 地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第665集として、千葉県県土整備部の地域活力基盤創造交付金委託（国府台遺跡埋蔵文化財発掘調査）に伴って実施した、市川市国府台遺跡第13地点の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良時代から平安時代にかけての集落が検出され、下総国府の周辺域の状況と変遷を示す良好な資料が得られました。この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理まで御苦勞をおかけした補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤 羽 良 明

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による地域活力基盤創造交付金委託（国府台遺跡埋蔵文化財発掘調査）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市川市国府台一丁目2-105ほかに所在する国府台遺跡第13地点（3）（遺跡コード203-003(3)）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部葛南地域整備センターの委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長及川淳一、西部調査事務所長橋本勝雄、副部長兼整理課長西川博孝の指導のもと、上席研究員安井健一が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成22年10月1日～平成22年10月29日
整理作業 平成22年11月1日～平成23年1月31日
- 5 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - ・国土地理院25,000分の1地形図（「松戸」N1-54-25-2-1、「船橋」N1-54-25-2-2）
 - ・地図資料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成「松戸」「船橋」柏書房
 - ・市川市2,500分の1都市計画基本図№8（IX-KE 91-2）
- 6 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。
 - ・1947年在日極東米軍撮影写真のデジタルデータ（空中写真整理番号UM390、コース番号A、写真番号17）
- 7 本書で使用した図面の方位は全て座標北である。座標値については世界測地系を使用した。
- 8 遺物の色調は、農林水産省・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖 2002年版』（日本色彩研事業株式会社発行）を参考にした。
- 9 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の御指導・御協力を得た。
千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部葛南地域整備センター、市川市教育委員会、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院
五十川伸矢（京都橋大学現代ビジネス学部）

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	1
第2節 遺跡の地理的環境と歴史的環境	1
1 遺跡の地理的環境	1
2 遺跡の歴史的環境	3
3 主要な周辺遺跡	8
第2章 遺構と遺物	11
第1節 A区の遺構と出土遺物	11
1 A区の概要	11
2 竪穴住居跡	11
3 掘立柱建物跡と土坑	25
第2節 B区の遺構と出土遺物	29
1 B区の概要	29
2 竪穴住居跡	29
3 掘立柱建物跡	33
第3節 その他の出土遺物	33
1 試掘調査出土遺物	33
2 縄文土器	33
第4節 遺構内貝層の分析	35
第3章 まとめ	39
第1節 遺構と遺物の時期と変遷	39
1 遺構と遺物の時期	39
2 国府の変遷との関わり	40
第2節 SK001土坑について	41

挿図目次

第1図	調査区の位置 (1/25,000)	2	第12図	SI006住居跡・出土遺物	20
第2図	調査区全体図及び グリッド配置 (1/1,000)	4	第13図	SI007住居跡	22
第3図	下層セクション	5	第14図	SI007住居跡出土遺物	23
第4図	周辺遺跡 (1/25,000)	6	第15図	SI008住居跡・出土遺物	24
第5図	上層遺構平面図 (1/200)	10	第16図	SB001掘立柱建物跡・出土遺物、 SK001土坑、SK002土坑・出土遺物	26
第6図	SI001住居跡・出土遺物	12	第17図	SK001土坑出土遺物	28
第7図	SI002住居跡・出土遺物	14	第18図	SI009・010住居跡、出土遺物	30
第8図	SI003・004住居跡	16	第19図	SI011・012・013住居跡、出土遺物	32
第9図	SI003住居跡出土遺物	17	第20図	SB002掘立柱建物跡・出土遺物	34
第10図	SI004住居跡出土遺物	18	第21図	試掘調査出土遺物、縄文土器	34
第11図	SI005住居跡・出土遺物	19			

表目次

第1表	貝類同定結果	35	第3表	土器観察表	36~38
第2表	貝計測値	35	第4表	土器器種別・器形別重量一覧	41

図版目次

図版1	遺跡周辺空中写真 (1947年、約1/10,000)	図版8	SK001、SK001・SB001切り合い状況、 SK001遺物出土状況
図版2	A区調査前風景、B区調査前風景、下層セ クション	図版9	出土遺物 (1)
図版3	A区遺構検出状況、SI001、SI002	図版10	出土遺物 (2)
図版4	SI003、SI003カマド及び遺物出土状況	図版11	出土遺物 (3)
図版5	SI004、SI005、SI005貝ブロック検出状況	図版12	出土遺物 (4)
図版6	SI006、SI007、SI008	図版13	出土遺物 (5)
図版7	SI009・SI010、SI011・SI012・SI013・ SB002、SK002		

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県県土整備部は、主要地方道市川松戸線の渋滞解消策として市川市国府台地区の拡幅工事を計画し、事業地内の埋蔵文化財の取り扱いについて千葉県教育庁教育振興部文化財課と協議した。その結果記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が調査を実施することとなった。

事業地は国立国際医療研究センター国府台病院の敷地内であり、病院の施設や用地境のフェンスなど撤去が困難な地上構築物がいくつか存在していたため、その取り扱いについても協議を行い、最終的には2地点512mが調査対象となった。また、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である国府台遺跡の一角に位置するが、この周辺では個人宅造などに伴うごく小規模な調査がほとんどであり、実態に不明な点が多かったため調査に先立ち文化財課による試掘が行われた。その結果全域に遺構が存在することが明らかになったため、上層は確認調査を実施せず全面本調査とした。下層については確認調査を実施し、その結果に基づき本調査範囲を決定することとした。

2 調査の方法

調査区は $X=27.940$ 、 $Y=+6.420$ を起点として20m四方の大グリッドを設定し、北から南へ1・2・3…、西から東へA・B・C…と呼称し両者を組み合わせて表記している。更に大グリッドを東西南北それぞれ2mごとに10等分し、全体を100区画に分けた小グリッドを設定した。小グリッドの番号は北西隅が00で、東に向かって01・02・03…、南に向かって10・20・30…となり、南東隅が99になる。個別のグリッド名称は大グリッド名と小グリッド名を組み合わせて、例えば3B-55や9C-10などといった方式で呼称している(第2図)。なお、このグリッド番号は、当財団が平成21年度から22年度にかけて実施した国府台病院内の調査(国府台遺跡第13地点(2))のグリッド番号を踏襲している(未報告)。

上層は全域512mの本調査の結果、奈良・平安時代の堅穴住居跡14軒、土坑2基、掘立柱建物跡2棟が検出された。下層は対象面積の2%にあたる12mの確認調査を実施したが、遺物は出土しなかったため本調査を行わず終了した。当調査区の立川ローム層の堆積状況は第3図のとおりである。

第2節 遺跡の地理的環境と歴史的環境

1 遺跡の地理的環境

国府台遺跡は江戸川左岸の標高約23mの台地上に位置する(第4図)。下総台地西側の東京低地に面した一帯は標高20~30m前後の平坦面となっており、東京低地との境は急な斜面となっている。現在でも斜面が江戸川沿いに連なっており、東京側から見ると台地の存在感が際立つ。ちなみに国府台の南側の「真間」という地名は、古代の言葉で急な崖を意味する「ママ」から生まれたという(山路 2006)。

遺跡が立地する台地は広く国分台と呼ばれており、市川市内の下総台地の最西端にあたる。西を江戸川、南を真間川、東を国分川によって区切られていて、東西幅は約2kmである。さらに南東側から入り込む六反田支谷によって東は国分台、西が国府台、そして国府台の先端が須和田台と分けられる。先述したとお



第1図 調査区の位置 (1/25,000)

り国分台は低地との比高差が大きく台と呼ぶにふさわしい景観であるが、須和田台は標高が低い段丘となり、先端部に至って須和田砂州と呼ばれる砂堤帯となっている。

国府台南側は真間川が東西に流れて江戸川に注いでいるが、縄文海進時には奥東京湾の波打ち際となっていた。縄文時代中期以降の海退に伴い、現在の市川から船橋付近にかけて東南東-西北西方向に砂州が形成された。市川砂州と呼ばれる自然堤防であり、これによって台地と砂州の間に内湾状の入江が残された。砂州の形成は弥生時代までにほぼ終わったとされ、以降現在に至るまで下総を東西に往来する重要な交通路となり市街地が形成される。一方で入江は明治時代に耕地整理されるまで規模を縮小しつつ存続し、万葉集で「真間の入江」と歌われるほどかつての市川を代表する景観となった。なお、先の須和田砂州はこの市川砂州より先に形成されたとされるが、その時期は不明である。

台地上は現在ほぼ平坦面となっているが、これは明治以降軍用地となり、終戦後は学校用地や病院といった公共用地として住宅地となって大規模に造成されたためであり、本来は微妙な起伏があったとみられる。そのため削平されてしまった場所もあるが、今回の調査区については表土が厚く遺存状況は良好であった。

2 遺跡の歴史的環境

国府台遺跡は国府台（台地）のほぼ全域を占める極めて範囲の大きい遺跡であり、いくつかの周知の遺跡を含んだ総称でもある。ごく小規模なものも含めると相当数の調査が行われており、成果は主に市川市教育委員会の手によって部分的ではあるが紹介されているほか、国府全体の構造や周辺社会の様相などについて、市立市川考古博物館の山路直充氏・松本太郎氏によって精力的に研究されている。そこでここではそれらを踏まえて国府の領域と変遷に主眼を置いて概観する。なお、調査地点は「国府台遺跡〇〇〇地点」という呼称法が使われているが、煩雑になるためここでは「国府台遺跡」は省略し地点名のみで表記する。また、主として個人宅造に伴う小区画の調査については引用注記を省略する。

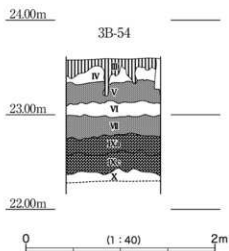
国府の中心的施設となる国庁については、現在の市営国府台公園野球場付近とする説が有力であるが、残念ながら発掘調査では確認されていない（第4図2）。この野球場建設時に布目瓦が多数出土したという目撃情報があるが第一の根拠であるとのことである（市川市教育委員会編 1979）⁽²¹⁾。現在のところ周辺の調査成果などにより、位置についてはおおむね妥当であろうという見解が大勢となっている。

野球場の東側には市川市指定史跡である下総総社地点が存在する（第4図3）。現在須和田に所在する六所神社が明治期に移設されるまで置かれていた跡で、移設された後も境内はそのまま残されていたが、野球場造成でかなり縮小した。1986年に確認調査が行われ、堅穴住居跡12軒、溝5条が検出され、時期は8世紀を中心として9世紀まで続いている（松本・松田 1996）。神社そのものの遺構は確認されなかった。六所神社の初現がいつごろかについては未だ判断するための材料に欠けるが、中世の国衙と「六所之宮」という名称の神社が密接なかわりを持っていたことは他国の事例でも知られており、国府の位置を示す有力な手掛かりになるという。なお、下総総社地点の小学名は「府中」であるが、南北朝時代の文献においてすでにこの名称が登場しており、地名としてはこの時期には成立していたと考えられる（山路・湯浅・池田 1997）。ただし、古代から中世にかけて国府がどのように変遷していくか、未解明な点は多い。

この地点の東側に隣接しているのが市営総合運動場地点である（第4図4）。調査成果は概要のみ公表されていて不明な点が多いが、堅穴住居跡65軒、堅穴状の特殊遺構4基、掘立柱建物跡8棟、溝6条、



第2図 調査区全体図及びグリッド配置 (1/1,000)



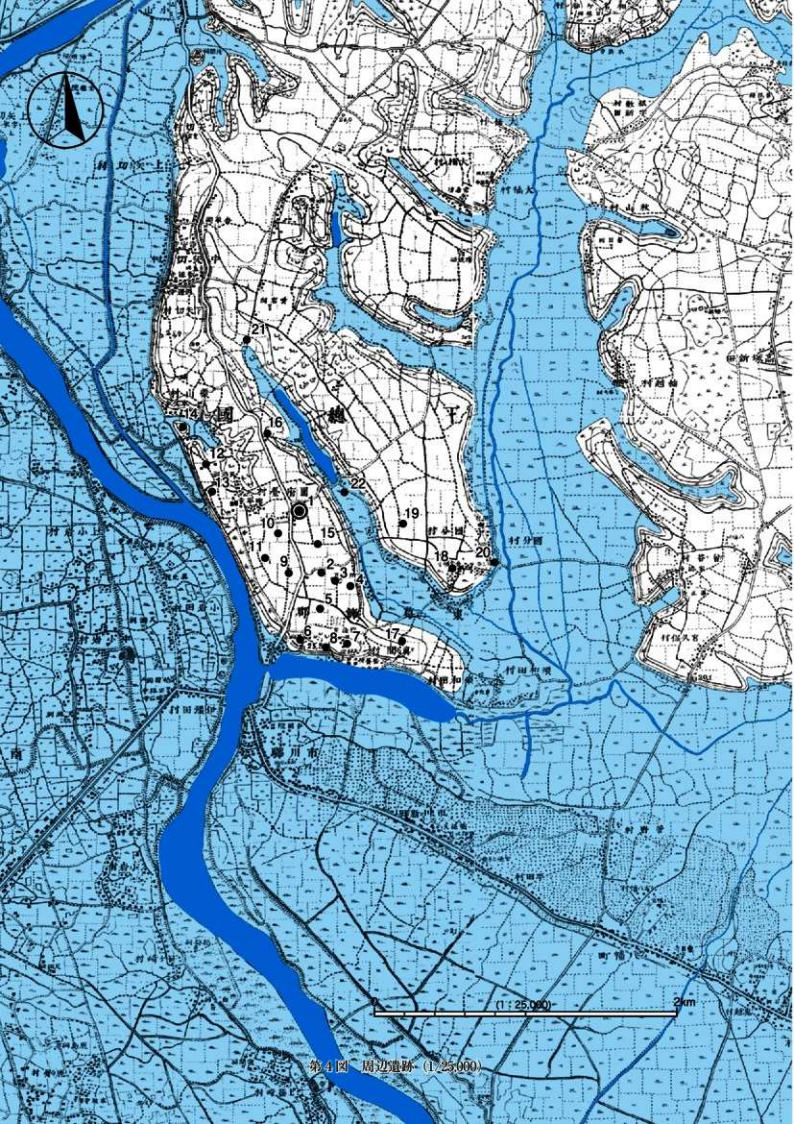
- III : ソフトローム層。ほぼ均質にソフト化しているが、ハードロームブロックの混入も認められる。なお、黒色土がしみ状に混入している部分も多くまぎらわしい。
- IV : ハードローム最上層。赤色のスコリア状物質微混。全体に硬いがもろくクラック発達。
- V : BB1。全体に褐色でIV層との区別は比較的容易。黒斑状の物質やや多混。
- VI : AT。明黄褐色を呈し、部分的に火山ガラスがブロック状に混入。黒斑状物質も多混。極めて硬い。
- VII : BB2との漸位層。色調はVI層より暗いが、ブロック状にATが混入。黒斑状物質多混。VI層よりやややわらかい。
- VIIa : BB2。ただし、色は均質でなくまだらに黒褐色ロームと黄褐色ロームが混在。硬質、黒斑状の物質は少ない。
- VIIb : BB2。色はVIIa層より均質でX層との差も明瞭。赤色スコリア少混。黒斑状物質は少混。
- X : 立川ローム最下層。混入物はほとんどなし。やや軟質で粘性強。

第3図 下層セクション

土坑100基以上が検出されている。遺構の中心となる時期は8世紀で国府の設営と同時期になるが、明確に国府の施設と考えられる遺構は発見されていない。ただし国分寺創建瓦が多量に出土したほか、墨書土器、赤彩土器、「和同開珎」、獣骨など特殊な性格を帯びた遺物が出土しており、国府に関連する集落であることは明白である。また、両地点をまたぐように直線の溝が巡っており、国府の区画溝である可能性が強いとされている（桑原・宮内 1981）。

南側の千葉商科大学構内は第4地点と呼ばれており、校舎の改築に伴って小規模な調査が部分的に行われているが、ほとんど未報告のため内容については不明点が多い（第4図5）。第4地点-8調査区では古墳時代から続いてきた集落が国府の成立する8世紀前葉になって姿を消し、代わりに掘立柱建物群や鍛冶工房、区画溝が出現する状況を示しているという。第4地点の他の調査区でも区画溝や道路跡が確認されており、国府の規模や方角などを推測する手掛かりが得られている。

第4地点の南側の斜面に面した部分は第29地点（第4図6）と第3地点（第4図7）になる。第29地点では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて集落が営まれた後、古墳時代終末期に群集墳が出現する。これらは現在も墳丘を残す弘法寺古墳、真間山古墳と合わせて国府台古墳群として捉えられる。特に弘法寺古墳（第4図8）は、後で触れる法皇塚古墳・明戸古墳とともに群の中で今のところ3基しかない前方後円墳であり、平面形態や規模などから先の2基と合わせて首長墓として認識される。国府が設置される8世紀には一時的に何も作られない空白地帯となるが、9世紀以降堅穴住居と土壘墓が作られる。古墳時代以降一貫して墓域とされていたと思われ、万葉集に所収されている「真間の手児名（奈）」の歌はこれらの古墳群を背景に成立したと考えられる（山路 2006）。なお、調査区南側の斜面には今でも切り通し状の遺構が残存するが、これは台地の下から国庁へ向かう官道の跡と考えられている（松本・松田他 2001、菊池・松岡・斉藤・小高・本・芝田 2002）。第3地点では弥生時代中期に方形周溝墓が築かれた後、古墳時代後期には多数の堅穴住居が作られる。それらもやがて国府造営とともに一掃され、掘立柱建



第4图 周边总图 (1:25,000)

物群と区画溝が出現する。区画溝は北方向から東方向に直角に曲がっていることが確認されており、群家（正倉）が存在した可能性が指摘されている。ただし掘立柱建物群と区画溝の築造年代については時間差があるようで、これは国府の機能拡充・再編と周辺地域の整備などが要因となっているようである（松本 1996a、松本 2006）。

西側の県道市川松戸線を挟んだ向かいの和洋学園地点は、近年最も成果を上げた地区である（第4図9）。この地点の調査によって古代の官道の実態とその変遷、国府の規模や周辺施設の配置など具体的な姿が明らかになってきたと言える。最大の成果は台地を南北に縦断する道路が発見されたことで、しかも時期を異にして規格の異なる道路が造成されていたことも明らかになった。国府成立期である7世紀末には、台地の下から国庁まで両側に区画溝を持つ幅6mの道路が作られる。この道路は下総と武蔵をつなぐ幹線道路（駅路）と国府とを結ぶために造られたと考えられる。併せて台地を東西に横断する道路も検出されており、先の道路と同時期に造成されたと考えられる。この道は西側の第41地点でも検出されている。この2本の道路に伴うように竪穴住居跡や掘立柱建物が検出されており、国府関連施設（曹司？）と考えられるが、成立時期は国庁からやや遅れるようである。なお、南北の道路は8世紀前半には使われなくなり、第29地点で検出された切り通しへ移ったとされている。9世紀前半になると先の道路から若干方向をずらして新しい道が造成される。これは両側に区画溝を持ち幅13.5mにも及ぶ大規模なもので、東側には幅3mの大規模な区画溝が平行するように作られる。この溝は先の第4地点-8調査区で検出されたものとはほぼ同規模であり、方形に区画された区域が出現したことを示すと考えられる。すなわち国庁だけでなく付属施設も含めた国衛が形作られたことを示すものといえる。また、新しい道路はさらに北に延びており常陸国府方面まで至る駅路と考えられる。この時期には武蔵国が東山道から東海道へ移り、それに伴って駅路が変更になったことが知られている。そうした状況を具体的に示すものとして重要である（寺村・駒見・禰・見留編 2004、山路 2006）⁽¹²⁾。

和洋学園の北側には東京医科歯科大があるが、その構内に法皇塚古墳が存在する（第4図10）。墳丘の現存長54.5mの前方後円墳で、6世紀半ばの築造と考えられ、国府台古墳群では最古とされている。横穴式石室が残存しており、中からは銅剣・金銅製耳環・金銅製帯金具・ガラスおよび石製玉類などの装飾品、衝角付冑・挂甲などの武器、大刀・鉄鏃などの武器、雲珠・轡・鏡・辻金具などの馬具といった豊富な副葬品が出土した。墳丘からは円筒、家形、人物などの埴輪が出土しているが、これらの中には埼玉県鴻巣市生田塚埴輪窯で生産されたものも含まれる。また、石室の石材は南房総産の軟質砂岩である。副葬品の質だけでなく他地域との幅広い交流を行っていたことも併せて、まさに首長墓と呼ぶにふさわしい内容であるといえる（小林・熊野編 1976、堀越・佐々木 1981）。ただし周辺には法皇塚古墳に先行する古墳はほとんどなく、まさに突如強力な首長が出現したような状況となっている。

和洋学園地点からは北西、法皇塚古墳からは南西の方向に第1地点が存在する（第4図11）。江戸川の崖まで100m程度の位置である。330m程度の面積ながら竪穴住居跡が7軒検出され、遺構の密度は濃い。時期は古墳時代後期から9世紀前半までは連続しており、国府台古墳群の築造期から国府設立に至る間、一貫して集落が営まれたことになる。奈良・平安時代の遺構からは帯金具や転用鏡、二彩陶器など国府に関連する遺物の出土が目立つ（斉藤 1991）。

東京医科歯科大の北西側は現在里見公園となっているが、ここから北側の江戸川に沿って舌状の台地が延びており、全域が国府台城として周知されている（第4図12）。国府台城をめぐるのは里見氏と後北条

氏による国府台戦の舞台として名高く、文献にもたびたび登場することから戦略上の拠点として重要視されていたことが推測されるが、城主が誰であったかなど不明な点も多い(千野原 2004)。また、明治以降こも軍用地となり大きく改変されたため当時の状況を知る手掛かりには乏しい。なお、城城内には明戸古墳(第4図13)と丸山古墳(第4図14)が存在し、いずれも6世紀後半以降の築造と考えられる。明戸古墳は国府台城の土塁に改造されたため変貌著しいが、2基の箱式石棺は手がつけられず残されたため古墳であることが判明したものである。

国府の北側は今回の調査区がある第13地点(国府台病院)となる(第4図15)。病院の改築や病棟新設などに伴って市川市教育委員会および(財)千葉県教育振興財団によって断続的に調査されている(松本編 1999、田島 2001、松本・松田他 2001、曾根・松本 2008)。最も規模が大きい平成21～22年度の調査区では奈良・平安時代の竪穴住居跡約40軒、掘立柱建物跡2棟以上、土坑などが検出されたほか、灰釉陶器や瓦なども出土した。なお、この調査区では15世紀代の台地整形区画も検出され、掘立柱建物跡や地下式坑、粘土貼土坑、火葬遺構などが検出されている。先述した国府台城は15世紀後半に太田道灌やその弟資忠、千葉自胤が境根原(柏市)や臼井城(佐倉市)などを攻略する際陣地を構えたのが始まりとされており(千野原 2004)、そうした状況に対応する遺構群として注目される。

第13地点の北側は住宅地であり、ごく狭い調査区がほとんどである。調査回数もすでに数十か所に及んでいるため各調査の詳細には触れられないが、ほとんどの調査区で古墳時代後期から9世紀前半までの遺構が検出されており、遺構の密度が極めて濃いことが明らかになっている。また、出土遺物も搬入品の須恵器や灰釉陶器、瓦、帯金具など、国府との関連をうかがわせるものが多い。

国府推定地より約1km北の国府台5丁目付近に至ると、西側からやや大きな支谷が入り込み台地がくびれている。それに対応するように東のじゅん菜池側より台地に向かって小支谷が入り込んでいる。遺構群もこの付近でひとまず取束しているようであり(第70地点)、遺跡の北端とみなしていると思われる(第4図16)。国府城の北限と推定することもできようが、この点についてはまだ見解の一致をみていないようである。先に触れた官道(常陸への駅路)は現在の県道市川松戸線と同一であり、さらに北へ延びている。

なお、先行する時代についてはごく簡単に触れておく。旧石器時代については北端部の第46地点においてⅣ～Ⅴ層中よりナイフ形石器などが出土している。その他、上層グリッド中から遺物が出土している地点がいくつかある。縄文時代については第13地点で陥穴が、第29地点で竪穴住居跡と考えられる遺構が検出されている。

3 主要な周辺遺跡

国府台遺跡の周辺も多くの遺跡が存在するが、ここでは古墳時代から奈良・平安時代を中心として簡単に概観する。

前項で述べた第3地点の東側は須和田遺跡が存在する(第4図17)。弥生土器の標識遺跡として名高いが、古墳時代以降も多数の遺構が検出されており、特に8・9世紀は実質国府の一翼を担っていたと考えられる。第4・第6地点では、8世紀後半を中心とした土器や貝殻・獣骨が多量に投棄されたすり鉢状の土坑が検出されており、そのうち第6地点では「右京」銘の墨書土器が含まれていた。また過去には「博士館」銘の墨書も出土しており(土取りの際発見されたという)、国府の領域あるいは施設に関わる情報を示すものとして重要である。

遺跡の東側、六反田支谷を挟んだ対岸の国分台には、下総国分寺が存在する。1960年代以降数多くの調査が行われており、伽藍配置や寺域などかなり具体的に解明されている。僧寺（第4図18）は台地東側に立地し、寺域は発掘された区画溝から推定して南北336m、東西360mの規模と考えられる。伽藍配置は東に金堂、西に塔、北に講堂が配置される法隆寺式である。他に寺の営繕や役務に関わる施設そして講師院・読師院と考えられる施設が確認されている。尼寺（第4図19）は台地西側に立地し、寺域は同じく南北330m、東西324mの規模と考えられる。伽藍は溝で区画され、南に金堂、中央に講堂、北に尼坊が配置される。他に寺の営繕や役務に関わる施設や倉などが確認されている。両寺院を中心とする国分台も小規模ながら多くの調査が行われており、国分寺および国府に関する様々な成果が上がっている。なお、台地東端には僧寺の瓦を製作した窯が存在することが分かっていたが（北下遺跡）、近年発掘調査が行われ国分寺創建期の瓦窯であったことが判明した（栗田 2008）。また、台地下側の低地からは旧河道中から大量の瓦や墨書土器、木製品が出土している（2011年1月現在調査中）。国分寺および国府周辺域の状況を示すものとして注目される（第4図20）。

遺跡北側の六反田支谷最奥部は小規模な舌状台地となっており、その付け根に新山遺跡が位置する（第4図21）。調査区西側で南北方向に連なる溝状遺構が検出されている。幅約6mで底面から硬化面が検出されており、覆土からは8～9世紀の土器が出土している。その様相や他遺跡の事例から古代の道路跡と考えられており（山口・田形他 1990）、国府台遺跡和洋学園地点で検出された南北方向の官道の続きであると推定されている（山路 1997）。この道路跡は国府台4丁目付近で市川松戸線と別れて松戸市二十世紀ヶ丘方面へ通じる現道とほぼ並行していると考えられ、古代の道路跡を現在も辿れる興味深い事例といえる。

遺跡東側の谷はかつて数か所で瓦が採取されたことが報告されているが、現在は宅地化されていて場所を特定するのは難しい。また、じゅん菜池南側の低地包含層からは古代～中世の木製品を中心とする遺物が出土しており、不入斗遺跡と名付けられている（市立市川博物館編 1981）（第4図22）。

註

1. このあたり的事実関係は、全て滝口 宏氏の記述に拠っている。ただし、例えば1974年に刊行された『市川市史第2巻』では、野球場の場所とは明言していないものの工事の際の目撃情報として「多少の土器片・瓦片を散見したにとどまる」（滝口 1974）と記述しており、5年の間に見解が大幅に変更されたこととなる。山路直充氏は1979年の記述に積極的な評価を与えているが（山路・湯浅・池田 1997）、第三者としてはどちらを信用すべきなのか判断できない。
2. 和洋学園の調査成果については3回にわたり概報が刊行されているが、ここでは2004年刊行の本報告に拠った。

X=27980

Y=6440

B

Y=6460

C



A区

3



SI005

3B-54

SK002

SB001

SI003

SI002

SK001

SI001

SI004

X=28000

■ 下層確認グリッド

SI007

4

SI008

X=28020

5

機
庫

(1:200)

20m

X=28100

C

9

B区

SI009

SI010

X=28120

SB002

SI011
~013

Y=6460

第5図 上層遺構平面図 (1/200)

第2章 遺構と遺物

第1節 A区の遺構と出土遺物

1 A区の概要(第5図)

A区は国府台病院敷地の北西端にあたり、病院正門とじゅん菜池緑地入口交差点との間約440㎡の広さを持つ地点である。病院正門脇は幅1mほどであるが北に行くに従って漏斗状に広がり、交差点南東側は三角形になる。交差点脇にはガスガバナーが設置されていたが、これも移設が必要であったためその予定地も調査対象となった。3B-74グリッド付近の4×3.4m程度に出張った方形の部分が移設予定地である。調査前は病院の施設が存在したほかは荒蕪地であった。現道との境は土塁状に盛り上がっていたがこれは擁壁を支持するために盛ったものであり、実際の地表面の高さは現道とほぼ同じであった。なお、調査区南側は攪乱が著しく遺構検出は不可能であった。検出された遺構は竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2基である。

なお、遺構の項目の凡例を以下に記す。

〔概要〕 検出から調査終了までの経過や所見、特に説明が必要な点について記す。

〔位置〕 遺構が存在する全グリッドの番号。

〔他遺構との切り合い関係〕 切り合っている遺構名及び当該遺構との新旧関係。

〔形状と規模〕 遺構の平面形状と、カマドが存在する壁上端と対向する壁上端との距離を主軸長、直交する壁上端間の距離を横軸長として記す。掘立柱建物の場合、全体形状ではなく個々の柱穴の形状・規模を示す。

〔主軸方位〕 竪穴住居跡の主軸の方位を、北(N)または南(S)を基準(0°)として東(E)もしくは西(W)へ何度振れているかを示す(例:北東の場合、N45°-E)。

〔桁行方位〕 掘立柱建物跡の桁行の方位を示す。表記法は竪穴住居跡の主軸方位と同じ。

〔覆土〕 覆土の埋没状況と自然堆積か人為堆積かの判断について記す。

〔床面〕 床面の状況、特に硬化面の有無について記す。

〔カマド〕 火床部前面もしくは掘り方前面から煙道最奥部までを長さ、両袖の端部間の距離を幅、袖上端部から火床面もしくは掘り方下までの比高差を高さとする。未検出(調査区外)の場合省略する。

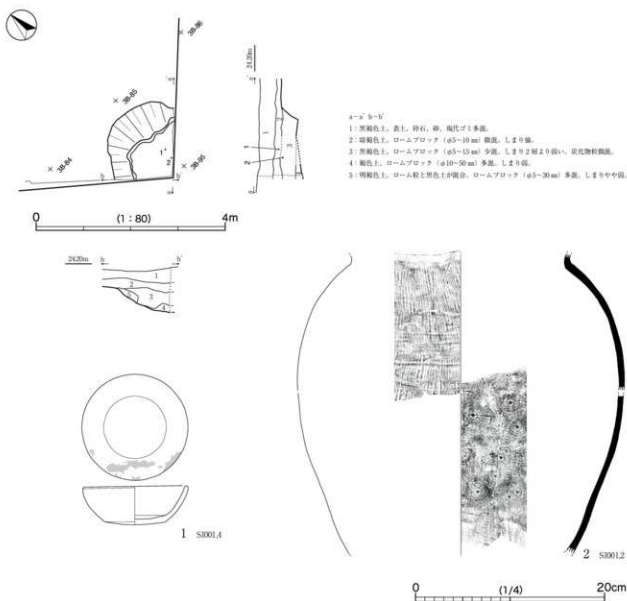
〔ピット〕 検出されたピットのうち柱穴、貯蔵穴、出入り口ピットなど主要なピットの所見とデータを記す。ピット番号は図と対応する。床面での直径と床面からの深さを記す。楕円形の場合は長径と短径を別に記す。未検出(調査区外)の場合省略する。

〔遺物出土状況〕 遺構内の遺物出土状況について記す。遺物の個別データは章末の第3表で提示し、事実記載については特徴的な点について記すこととする。器種・器形別の重量データは第3章第4表に示す。

2 竪穴住居跡

SI001(第6図、図版3・9)

〔概要〕 調査区東側、ガスガバナー移設予定地に位置する。全体規模は不明であるが、おそらく大半が調査区外になると思われる。確認面で検出した際は楕円形を呈していたためそのつもりで掘り始めたが、結



第6図 SI001 住居跡・出土遺物

果としては黒色土とソフトローム粒が混在した楕円形の落ち込みに、不整形の当遺構が掘りこまれていたことが判明した。楕円形の落ち込みは壁も不確かで遺物もなく、人為的な遺構である可能性は低い。最終的に掘り上がった段階でやや不整ながらも方形を呈するように壁が検出されたため、これを遺構範囲とした。

〔位置〕3B - 84・85。

〔形状と規模〕検出された範囲では不整形。ほとんど調査区外で主軸・横軸の判断はできないため、検出された壁の長さを記す。東西長130cm×南北長54cm×深さ44cm。

〔覆土〕少量のロームブロックを含む黒色土が主体で全体にしまり弱い。床面上はロームブロックを多量に含む土層が堆積していて貼床の可能性もあるが、しまりは上層に比べさらに弱い。

〔床面〕すり鉢状にへこむ。硬化面は検出されなかった。

〔遺物出土状況〕 図化したものを含め多くの遺物は覆土上部、表土との境に近いレベルから出土した。逆に床面直上にはほとんど無かった。なお、灰陶陶器長頸瓶もしくは壺の破片も出土したが図化できなかった。

1は土師器杯で完形である。灯明皿として使用されたため内面に油煙が付着する。使用された痕跡はほとんどない。2は須恵器甕破片で、接合しない同一個体を図上復元した。外面の拓本は頸部側、内面は底部側である。内面は同心円状の当て具痕をナデ消している。

SI002 (第7図、図版3・9・13)

〔概要〕 SI001 堅穴住居跡の北西側に位置する。県文化財課の試掘調査で存在が確認された。南側が調査区外となる。カマドが東側の壁から検出されている。

〔位置〕 3B - 73・74・83・84。

〔他遺構との切り合い関係〕 SK001 土坑に切られる。SB001 掘立柱建物跡のP3との切り合いは確認していないが、当遺構が新しいと考えられる。

〔形状と規模〕 隅丸長方形。主軸長(東西)232cm×横軸長(南北)推定250cm×深さ20cm。

〔主軸方位〕 S-S1°-E。

〔覆土〕 上層はロームブロックが少なく下層は多く含むが全体にしまりは弱い。いずれも人為堆積の可能性が高いが、遺物の出土状況から上層と下層との間にやや時間差があると思われる。

〔床面〕 全体に脆弱。はっきりした硬化面はない。

〔カマド〕 長さ82cm×幅65cm×高さ28cm。全体に遺存度が悪く、特に袖はほとんど砂が混ざっていないため範囲の識別が難しい。

〔遺物出土状況〕 覆土上層と下層の境、皿状に遺物が出土している。なお、灰陶陶器長頸瓶の破片が出土しているほか、平瓦の破片が1点出土しているがいずれも小破片のため実測は省略した。

1～5は土師器杯である。1には外面・底面にススが付着する。2は底部のヘラケズリ調整が雑で凸凹している。3には外面に横位置で「寺」銘墨書が記される。底部にも油煙が帯状に付着するが、意図的かどうかは不明。内面は漆処理されていると思われるがはっきりしない。以上3点は使用された痕跡があまりない。4は内面漆処理と思われるが熱によると思われる摩耗が著しくはっきりしない。6は土師器皿で、内・外面とも口縁に沿って帯状にススが付着する。底面には割れ目に沿って敲打痕が認められる。7～11は墨書土器である。7が杯底部、それ以外は杯皿類で、8が口縁部、9～11は胴部である。文字はいずれも判読不能である。12は土師器甕であるが、外面・底面に被熱山砂が多量に付着しており詳細不明である。13は須恵器甕で底面に布目のような圧痕があるが、パターンが不明確で断定できない。14は板状の鉄製品を3枚合わせたもので、表裏に木質が付着する。右側は棒状に伸びているが先端の形状は不明である。残存長37mm、残存幅6.5mm、最大厚12mm、重量5.96gである。性格、用途等不明である。

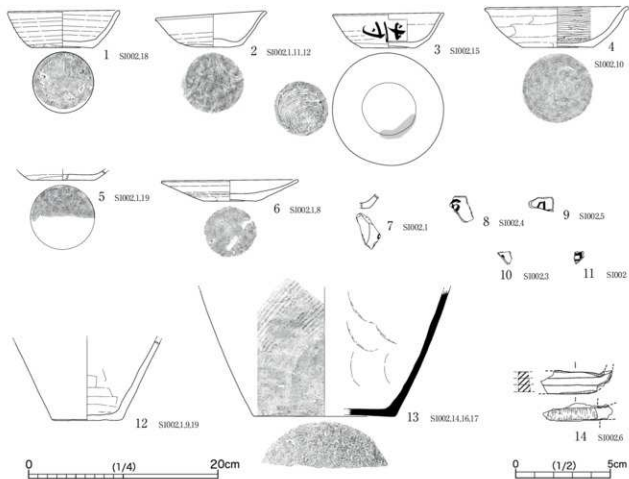
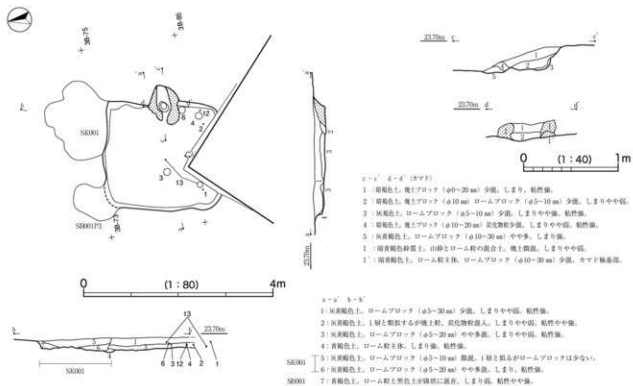
SI003 (第8・9図、図版4・9・10・13)

〔概要〕 SI002 堅穴住居跡の西側に位置する。

〔位置〕 3B - 61・62・71・72・81・82。

〔他遺構との切り合い関係〕 SI004 堅穴住居跡、SB001 掘立柱建物跡P4を切る。

〔形状と規模〕 隅丸長方形。隅カマドで主軸・横軸の判断ができないので、東西南北で表示する。東西長280cm×南北長256cm×深さ24cm。



第7図 SI002住居跡・出土遺物

〔主軸方位〕南北方向を主軸と仮定して、N-01°-W。

〔覆土〕ロームブロックをやや多く含む暗褐色土が大部分であるが、上下2層に分層できる。いずれも人為堆積の可能性が高いが、遺物の出土状況から上層と下層との間にやや時間差があると思われる。

〔床面〕中心部から南壁にかけて硬化面が残存する。逆に東西壁際はしまりが弱く、周溝覆土と判別できないほどである。

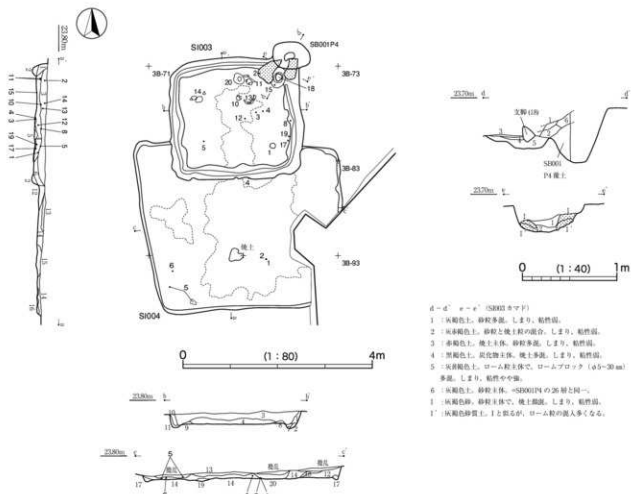
〔カマド〕煙道がSB001掘立柱建物跡P4の覆土を切っており、両者の境がはっきりしなかったため残存部のデータを示す。残存長84cm×幅72cm×高さ24cm。

〔遺物出土状況〕覆土上層と下層の間から皿状を呈するように多量に出土した。また、カマド周囲からの出土も目立った。なお、古墳時代後期と考えられる赤彩が施された土師器杯の破片が出土しているが、小破片のため実測しなかった。

1～7は土師器杯である。1は底部に墨書があるが判読不能。全体に摩耗がなく使用痕跡がほとんどない。2も摩耗が少ないが、口縁部に打ち欠きと思われる欠損が認められる。3・5は熱を受けており、特に5はかなり顕著である。6は外面にススが付着しその部分は熱を受けて摩耗している。7は灯明皿として使用されており、内面に油煙が多量に付着するほか外面にススが帯状に付着する。8は須恵器高台付杯で、硯に転用されている。ただし硯面はあまり使用された痕跡がない。また、底面には赤色顔料が付着しているが、塗布したのではなく飛散したような状況である。高台の欠損部にも付着が認められる。9は土師器高台付杯である。内面には漆と思われる黒色の物質が多量に付着しており、熱を受けて発泡している。高台先端は欠損しているが、かなり摩耗しており意図的な研磨が加えられたと考えられる。同様に漆の付着した土師器杯の破片が1点出土している。10は土師器杯蓋である。11は須恵器杯蓋で、20の鉄鍋のすぐ脇から出土した。ほぼ完形であるが全体に焼成が甘く器面は摩耗している。12は高杯形のミニチュア土器である。ただし全体にナデ調整が施されており、いわゆる手捏土器とは質感が異なる。13・14・16は土師器甕である。13はほぼ全体が残る。外面にススが付着する。14は上半分の復元であるが、接合しない破片が相当数ある。15は土師器台付甕である。内・外面ともススが付着する。17は須恵器甕である。接合しない破片から図上復元した。熱を受けており特に外面は剝落が目立つ。18は土製支脚でカマド火床面中央から立位で出土した。ほぼ完形で高さ15.7cm、最大径12.9cm、重量は1,719.2gである。19は平瓦の破片である。残存長9.1cm、残存幅7.1cm、最大厚2.1cm、重量111.4gである。焼成は悪く摩耗が目立つ。20は鑄造の鉄鍋である。住居床面上から伏せた状態で出土した。底部は欠損し口縁部も3分の1程度欠落しているが、胴部はほぼ全て遺存する。ただし鑄造品のため脆弱であり崩壊が予想されたため、土を落とした段階で略測的な実測図を作成した。掲載しているのはその図面で、その後損傷及びその修復のため写真では形状が変わっている。口径は約21.1cm、残存器高は13.4cmである。かなり重量感があり、磁着力も強い。口端部は平坦に整形されておりかなり丁寧である。底部は欠損しているが丸底と考えられ、そこから後縁を形成しながら徐々に上を向き、口縁部に向かって直線的に開く。器内は表裏2枚合わせのような構造となっており、間に空洞が挟まれた状態となっている。そこに錆が入っている部位は劣化も進行している。なお、鍋ならばこれまでの出土例から脚が付く可能性が高いが、当資料ではX線撮影を行ってみたもののそれらしい痕跡は認められなかった。

SI004 (第8・10図、図版5・10・13)

〔概要〕SI003堅穴住居跡の南側に位置する。南東側が調査区外となる。なお、カマドは調査範囲中では検



δ-δ' e-e' (SE03 キヤド)

- 1 灰褐色土、砂粒多量、しまり、粘性强。
- 2 灰褐色土、砂粒と焼土粒の混在、しまり、粘性强。
- 3 赤褐色土、焼土主体、砂粒多量、しまり、粘性强。
- 4 黒褐色土、炭化物主体、焼土多量、しまり、粘性强。
- 5 灰褐色土、ローム粒主体で、ロームブロック (45-30cm) 多量、しまり、粘性强や中強。
- 6 灰褐色土、砂粒主体、SE001P4 の26層と同一。
- 7 灰褐色砂、砂粒主体で、焼土混在、しまり、粘性强。
- 7' 灰褐色砂質土、1と似るが、ローム粒の混入が多くなる。

a-a' b-b' (SI02)

- 1 灰褐色土、ロームブロック (45-30cm) 多量、しまり、粘性强や中強。
- 2 暗褐色土、ローム粒、ロームブロック (45-30cm) 多量、しまり弱、粘性强や中強。
- 3 暗褐色土、ロームブロック (45-20cm) や中多量、しまり、粘性强。
- 4 暗褐色土、3層よりやや暗い、ロームブロック (45-30cm) や中多量、部分的に集中する、しまり、粘性强。
- 5 暗褐色土、ローム粒とロームブロック (45-20cm) の混在、しまりや中弱。
- 6 暗褐色土、3層よりやや明るい、焼土粒多量、しまり、粘性强や中強。
- 7 灰褐色土、ロームブロック (45-30cm) 多量、しまり、粘性强。
- 8 灰褐色土、砂粒、焼土粒多量、しまり、粘性强や中強、カマドからの灰が混入。
- 9 灰褐色土、ロームブロック (45-10cm) 多量、しまり、粘性强。
- 10 明灰褐色土、ローム粒主体、ロームブロックはほとんどなし、しまりや中弱、粘性强。
- 11 灰褐色土、黒色土主体でローム粒が混在、混入。

b-b' c-c' (SE04)

- 12 暗褐色土、ロームブロック (45-30cm) や中多量、しまり、粘性强や中弱。
- 13 灰褐色土、ロームブロック (45-10cm) 少量、しまり、粘性强、混入少量。
- 14 暗褐色土、ロームブロック (45-30cm) や中多量、焼土、炭化物粒混在、しまり、粘性强や中強。
- 15 暗褐色土、14層に似るが、焼土、炭化物粒中多量、しまり、粘性强や中弱。
- 16 明灰褐色土、ローム粒主体、ロームブロック (45-20cm) や中多量、しまり、粘性强や中強。
- 17 明灰褐色土、ほとんどローム粒、しまりや中弱、粘性强。
- 18 灰褐色土、ローム粒、ロームブロック (45-30cm) が混在に混入、しまり、粘性强や中強。
- 19 明灰褐色土、ローム粒とロームブロック (45-30cm) 主体、しまりや中弱、粘性强。
- 20 明灰褐色土、焼土粒が混在に混入、ロームブロック、炭化物粒混在、しまり、粘性强。

第8図 SI003・004住居跡

出されなかったが、SI003との境界付近で砂や焼土の塊がまとまって出土したことや、床硬化面も南北に発達していることから北壁に存在したと考えられる。

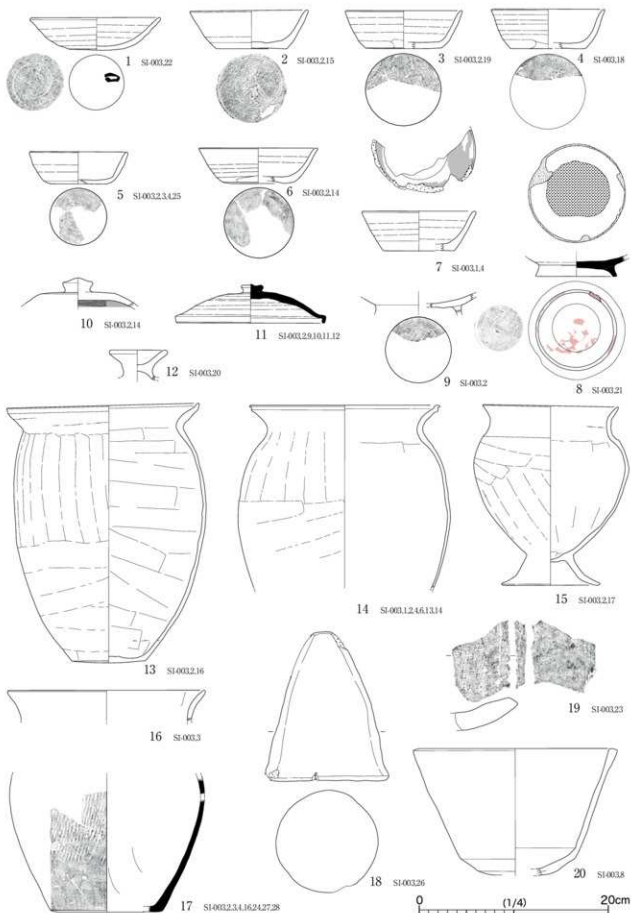
〔位置〕 3B - 70 ~ 72・80 ~ 83・91・92。

〔他遺構との切り合い関係〕 SI003 堅穴住居跡に切られる。

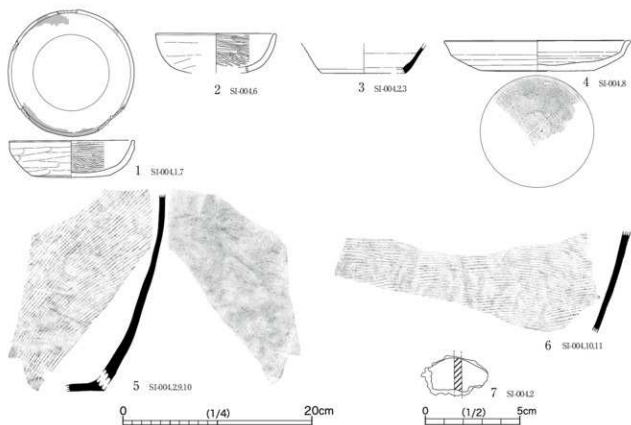
〔形状と規模〕 隅丸長方形。カマドが北側にあったと仮定して、主軸長 (南北) 374cm × 横軸長 (東西) 432cm × 深さ 22cm。

〔主軸方位〕 N-06° - W。

〔覆土〕 上部は攪乱と判別しにくい層もあった。ロームブロックをやや多く含むほか、焼土粒や炭化物粒



第9図 SI003住居跡出土遺物



第10図 SI004住居跡出土遺物

も含む。全体にしまりは強い。人為堆積であろう。

〔床面〕住居中央を南北にかけて硬化面が残存する。また、中心部やや南側の床面直上に焼土がブロック状に残存していた。

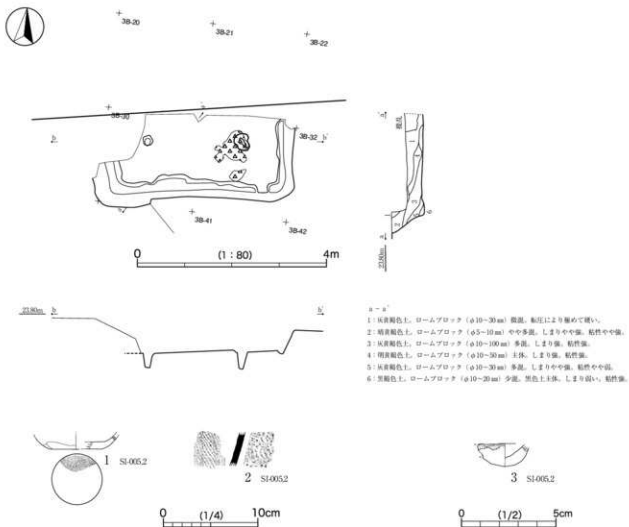
〔遺物出土状況〕量は少なく床面よりやや浮いた場所から出土した。なお、灰軸陶器長頸瓶と思われる破片も出土しているが、小破片のため図化しなかった。

1・2は土師器杯で、双方とも手持ちヘラケズリ成形によるものである。1は灯明皿として使用されており、内面に油煙が付着するほか内・外面とも広い範囲にスガが付着する。3は須恵器杯である。4は土師器盤で、外面は漆らしい物質を塗布する。5は須恵器甕で、接合しない同一個体を図上復元した。外面は縄文文が施され、自然軸が全面に掛かる。内面は同心円状の当て具痕をナデ消している。6は須恵器甕の胴部で、にぶい赤褐色に発色する。以上2点は猿投産か。7は板状の鉄製品であるが観察する限り全て破断面であり外形線に当たる部分は認められない。鋳造品の可能性も考えられる。残存長32mm、残存幅21mm、最大厚4mm、重量11.63gである。

SI005 (第11図、図版5・10)

〔概要〕調査区北端部に位置する。北側は現道で調査区外となる。また、現道の南側約5mの範囲で20cmほど削平されており、填圧が強かけられていたほか多量の砕石が堆積していた。にもかかわらず深さは40cmほどあり遺存状況は良好であった。

〔位置〕3A - 39、3B - 20・21・30 ~ 32・40。北側半分以上が調査区外。



第11図 SI005 住居跡・出土遺物

〔形状と規模〕 隅丸長方形か。主軸・横軸が不明なので東西南北で示す。東西長 428cm×検出部の南北長 194cm×深さ 64cm。

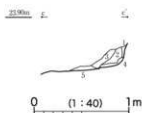
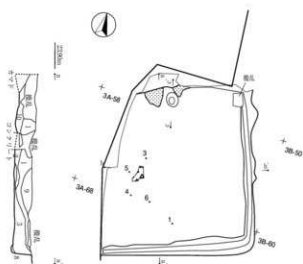
〔覆土〕 削平部分を避けるため、敢えて斜めにセクションベルトを設定した。壁から住居中央に向かってロームブロックを多量に含んだ土が床面直上まで流れ込んでおり、当住居が廃絶した後すぐに近隣で排出された土を投棄した可能性がある。最上層のみロームブロックが少なく、やや時間をおいて堆積したと思われる。填圧がかけられたせいかしまりは極めて強く、調査に相当な労力を要した。

〔床面〕 基本的に地山を掘削した面をそのまま床としており、全体に極めてしまりがよく硬化顕著である。壁際の一部に柔らかい部分を残すが、掘りすぎてしまった所もある。

〔ピット〕 2か所検出された。西側直径 21cm×深さ 31cm、東側長軸 39cm×短軸 32cm×深さ 41cm。

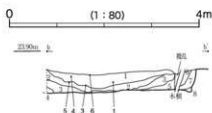
〔遺物出土状況〕 ごく少なく器形復元できる土器はほとんどなかった。覆土中から小規模な貝ブロックが 2か所検出されたほか、最上層（1層）の下端に沿って皿状を呈するように貝殻が散布していた。貝ブロックの分析結果は第4節に記載した。

1は土師器杯である。2は須恵器甕の胴部破片で、内面は同心円状の当て具痕が観察される。3は杯形



a-a' (切欠)

- 1 灰褐色砂、カマド跡の残存部(1)とすべさか、しまり部。
- 2 暗赤褐色土、砂粒と焼土粒の混入、しまり部。
- 3 黒褐色土、砂粒、焼土粒やや多量、しまり部。
- 4 灰褐色土、砂粒主体で、焼土粒少量、しまり部。
- 5 暗褐色土、ロームブロック(φ10-30mm)多量、しまり部、築地の一部か?

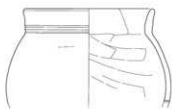


a-a' b-b'

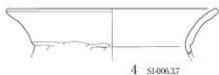
- 1 暗褐色土、ロームブロック(φ5-10mm)少量、しまり、粘りやや弱。
- 2 暗褐色土、ロームブロック(φ5-10mm)やや多量、1層よりやや明るい、しまり、粘りやや弱。
- 3 灰黄褐色土、ロームブロック(φ10-30mm)多量、黒色土塊状に混入、しまりやや強、粘り弱。
- 4 灰黄褐色土、ローム粒主体だがロームB12とんどなし、しまりやや弱、粘り強。
- 5 暗褐色土、ローム粒と黒色土が塊状に混入、ロームブロック(φ10-50mm)多量、しまり、粘り強。
- 6 暗褐色土、1層と類似するが、しまり強。
- 7 暗褐色土、ローム粒主体、ロームブロック(φ5-50mm)多量、しまり、粘り強。
- 8 黒褐色土、黒色土主体、ロームブロック(φ5-10mm)少量、しまり、粘り弱。
- 9 暗褐色土、ロームブロック(φ5-10mm)やや多量、炭化物粒少量、1層よりやや明るい、しまり強、粘りやや弱。
- 10 灰黄褐色土、ロームブロック(φ5-30mm)やや多量、砂粒塊状に混入、焼土粒、炭化物粒少量、しまりやや弱、粘り弱。



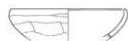
1 SI006.5



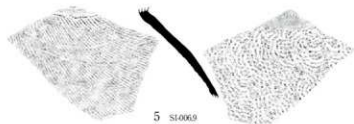
3 SI006.3A.10



4 SI006.37



2 SI006.23



5 SI006.9



6 SI006.6

0 (1/4) 20cm

第12図 SI006住居跡・出土遺物

のミニチュア土器である。口縁部はほとんど欠損しているが全体としては90%程度残存している。上面楕円形で口縁部の残存長軸2.8cm、短軸2.4cm、残存器高1.2cm、重量4.9gである。内面はヘラによる雑な成形、外面は指頭成形後ヘラナデを行っている。胎土は密で焼成は良好、色調は内・外面とも明赤褐色である。

SI006 (第12図、図版6・11)

〔概要〕SI005 堅穴住居跡の南西側に位置し、北と西は調査区外となる。上部を埋設鉄管が横断するほか、各所に電柱のワイヤーアソカが埋設されているなど攪乱が著しかったが、深さは40cm以上あり遺存状況は良好であった。ただしカマドは隣接するガスガバナーによってかなり破壊されていた。

〔位置〕3A - 48・49・58・59・68・69。

〔形状と規模〕隅丸長方形か。検出部の主軸長360cm×横軸長322cm×深さ48cm。

〔主軸方位〕N-17°-W。

〔覆土〕壁から住居中央に向かってロームブロックを多量に含むしまりの強い層が流れ込むように堆積し、その上にロームブロックの少なくしまりが弱い層(1層)がレンズ状に堆積する。状況としてはSI005に類似するが、さらにわずかに残った窪みを埋めるように土を盛った形跡がみられる(9層)。西側は調査区外となるが、セクションでは住居中央に向かって流れ込む土層が観察されており、壁までの距離はそれほどないと思われる。

〔床面〕掘った面をそのまま床としており、全体に極めてしまりがよく硬化顕著。壁際の一部に柔らかい部分を残すが、掘りすぎてしまった所もある。

〔カマド〕煙道部は攪乱で破壊され詳細不明。残存部だけを計測した。長さ44cm×幅96cm×高さ28cm。

〔遺物出土状況〕遺物は床面直上からは少なく、下層(2層)の上部に比較的集中していた。また、1層中からごく小規模な貝ブロックが検出された。分析結果は第4節に記載した。なお、古墳時代前期と考えられるハケ調整の土師器甕破片が出土したが、小破片のため実測しなかった。

1・2は手持ちヘラケズリ成形の土師器杯である。3・4は土師器甕である。3は頸部に沈線状の工具痕が認められる。全体に被熱が顕著で外面の調整はほとんど不明。ススも付着する。4は頸部にヘラのアタリが観察されるが技法としてはかなり雑。内面にススが付着する。5・6は同一個体の須恵器甕で、いずれも内面に同心円状の当て具痕が観察される。

SI007 (第13・14図、図版6・11・13)

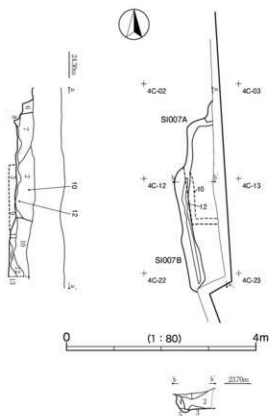
〔概要〕調査区中央部、SI004 堅穴住居跡の南側に位置する。西壁付近がかりうじて検出された状態で大部分が調査区外である。調査前は1軒の住居と考えていたが、調査の結果2軒の堅穴住居が切り合っていることが判明した。ここでは北側をSI007A、南側をSI007Bと呼ぶ。北側の貼床が南側まで達しており、SI007Bが古くSI007Aが新しいと考えられる。

〔位置〕4B - 02・12・22。

〔他遺構との切り合い関係〕北側に土坑状の別遺構が存在するが、調査できた部分が少ないため性格は不明である。

〔形状と規模〕SI007Aの南壁は、貼り床の位置から推定した。いずれも隅丸長方形か。SI007A：南北推定長224cm×東西検出長66cm×深さ44cm。SI007B：南北検出長264cm×東西検出長80cm×深さ40cm。

〔覆土〕壁から流れ込むようにロームブロックを多量に含む土が堆積し、後からロームブロックの少ない土がレンズ状に堆積する。いずれも人為堆積と思われるが、時間差があると考えられる。なお、貼床除去



a-a' b-b'

- 1: 暗褐色土、焼土粒、緑泥がブロック状に混入。しまり、粘りやや強。
- 2: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-20mm) 少量。しまりやや弱、粘り強。
- 3: 灰褐色土、ロームブロック (φ5-20mm) 多量。しまり、粘り強。
- 4: 明黄褐色土、ローム粒主体、ロームブロック (φ5-10mm) 多量。しまり、粘り強。
- 5: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-10mm) 少量。しまりやや弱、粘り強。
- 6: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-20mm) 少量。しまり、粘りやや弱-弱適量?
- 7: 暗褐色土、ロームブロック (φ10-20mm) やや多量。焼土粒少量。しまり、粘りやや弱。
- 8: 灰黄褐色土、ローム粒主体、ロームブロック (φ10-20mm) 多量。しまり、粘り弱。
- 9: 暗褐色土、ローム粒層状に混入。しまり、粘り強。
- 10: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-10mm) 焼土粒、炭化物少量。しまり、粘りやや弱。
- 11: 明黄褐色土、ローム粒主体で砂粒、焼土粒多量。しまり、粘り強。
- 12: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-10mm) 多量。しまり、粘りやや弱。
- 13: 明黄褐色土、ロームブロック (φ10-20mm) 多量。しまり、粘り強。4層と同一?

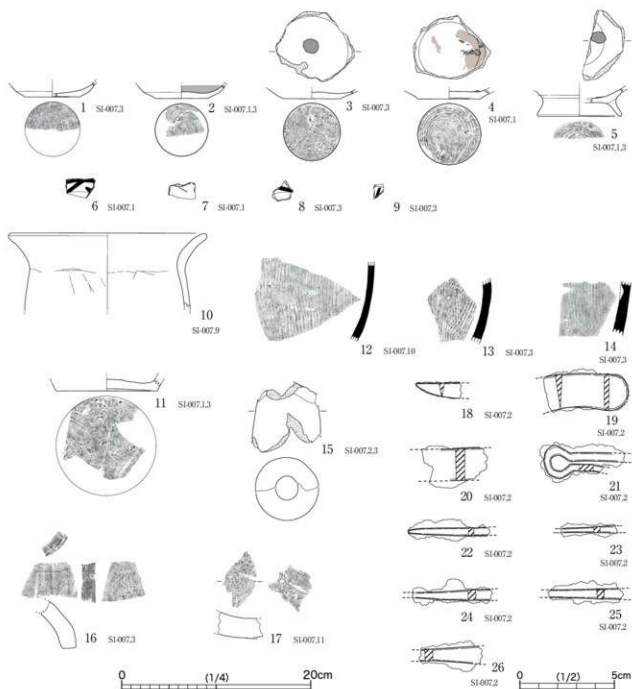
第13図 SI007住居跡

後のセクションの追加実測は行わなかったため、床面のラインは推定復元である。

〔床面〕全体に柔らかいが、住居隅だからであろう。

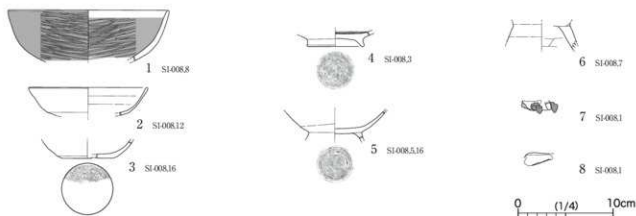
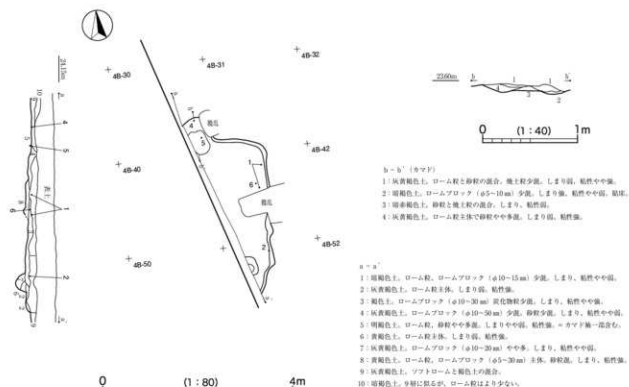
〔遺物出土状況〕遺物についてはAとBの区別はできなかった。全体に金属製品、鉄滓などが多く、製鉄関連遺構である可能性が高い。調査範囲が狭いため覆土の堆積状況と遺物の出土状況との関連は把握できないが、床面直上より覆土中層以上からの出土が多いように思われた。なお、灰軸陶器長頸瓶、皿の破片も出土しているが小片のため図化しなかった。

1~4は土師器杯である。2は内面に赤色顔料らしきものが付着するが、飛散しているような状況であり範囲は明示できない。3は中央に鉄滓が付着するほか、広範囲にススが付着する。器面の荒れが目立つ。4は内面に酸化鉄らしい物質が塗布されており、その後鉄滓が付着する。ただし赤彩とするには範囲に製作者の意図が感じられない。外面にも同じ物質が認められるが、飛散しているような状況であり範囲は明示できない。5は土師器高台付杯で、内面に鉄滓が付着する。これらの鉄滓について特殊金属探知機を使ってメタル残留状況を調べたが、いずれも反応がなかった。6・8・9は墨書土器である。いずれも土師器杯皿類で、6・8は胴部下側、底部直上の部分、9は底部である。判読は不能である。7は線刺のある土器である。意図的なものかどうか疑問があるが、とりえず図化した。10・11は土師器甕である。10は口縁側は比較的丁寧な横ナデであるが、頸部以下は部分的に雑なヘラのアタリが目立ち器面も荒れている。11は底面にススが付着する。内面の調整は雑。12~14は須恵器甕の胴部破片である。14は灰白色に発色する。内面は磨滅しており剥落が目立つ。15は羽口である。残存長66mm、残存幅72mm、残存厚21mm、孔径推定23mm、重量126.8gである。熱を強く受けており特に端部は融解している。16は丸瓦破片である。



第14図 SI007住居跡出土遺物

残存長45mm、残存幅38mm、最大厚17mm、重量51.7gである。上端隅にあたり、側縁部は下端に向かって開く形状を呈する。表裏とも縁辺に沿ってケズリ調整を行って厚さを絞っている。17は平瓦の破片である。残存長70mm、残存幅52mm、最大厚22mm、重量59.8gで、胎土にスコリアの混入が目立つ。全体に損傷が著しく、特に裏面は状態が悪い。18～26は鉄製品である。18は刀子の先端部で、残存長23mm、残存幅7mm、最大厚3mm（背部）、重量1.67gである。19は鎌と思われる製品の基部で、一部刃部が残存する。残存長45mm、残存幅刃部18mm・茎部19mm、最大厚刃部3mm・茎部2.5mm、重量13.72gである。20は幅広の棒状鉄製品で、残存長22mm、残存幅17mm、最大厚5mm、重量12.49gである。21は湾曲した棒状鉄製品で、



第15図 SI008 住居跡・出土遺物

残存長 40mm、残存幅 7mm、最大厚 3.5mm、重量 15.52 g である。ほとんど錆縮に隠れているため形状は X 線写真を参考にした。22~26 は棒状の鉄製品である。22 は残存長 42mm、残存幅 4mm、最大厚 3mm、重量 4.02 g である。23 は残存長 29mm、残存幅 4mm、最大厚 3mm、重量 1.91 g である。24 は残存長 39mm、残存幅 5.5mm、最大厚 4mm、重量 4.58 g である。左側は錆で湾曲している。25 は中間部が錆で湾曲している。残存長 38mm、残存幅 5.5mm、最大厚 4mm、重量 5.35 g である。26 は片側が開いており刀子の可能性もある。残存長 29mm、残存幅 9mm、最大厚 4mm、重量 4.91 g である。

なお、実測しなかった鉄屑類についても特殊金属探知機を使ったメタル残留状況の調査を行ったが、い

ずれも残留なしと判断された。

SI008 (第15図、図版6・11)

〔概要〕 SI007 竪穴住居跡の南西側に位置する。西側3分の2以上は現道にあたり調査区外となる。攪乱が多く遺存状況は悪い。

〔位置〕 4B - 30・31・40・41・51。

〔形状と規模〕 隅丸長方形か。検出部の主軸長330cm×横軸長180cm×深さ20cm。

〔主軸方位〕 N-05°-E。

〔覆土〕 他の住居跡に比べ極端に浅いが、上下2層に分けられる。いずれも人為堆積であろう。

〔床面〕 ほとんど硬化していない。

〔カマド〕 袖がほとんど残存していない。長さ(煙道端から火床部前面まで)78cm×幅(煙道幅検出部)65cm×高さ10cm。

〔ピット〕 南東隅に1基検出された。検出径41cm×深さ20cm。

〔遺物出土状況〕 覆土上層からの出土が多い。

1～3は土師器杯である。1の内面は口縁部の摩耗が顕著で断面形状は尖頭状になっている。黒色処理・ミガキとも施されていなかったのではなく剥落したものであろう。2も器面がやや摩耗している。3は外面に山砂が付着する。4・5は土師器高台付杯で、4は内・外面とも剥落がやや目立つ。5は内面にススが付着する。6は台部上端の接合面から剥落している。下端部は人為的な打ち欠きと考えられる。7は灰釉陶器皿と思われる高台の下端部で鉄滓が付着している。器面自体も高熱により発泡し形も歪んでいる。8は羽口先端部の破片で、高温により融解している。残存長14mm、残存幅30mm、残存厚19mm、重量6.3gである。

3 掘立柱建物跡と土坑

SB001 (第16図、図版12)

〔概要〕 SI002・003 竪穴住居跡の北側に沿うように、東西方向に柱穴が4基検出された。当初はこれを桁行と考えたため梁行の柱穴の検出に努めたが、ついに発見できなかった。櫛列の可能性も考慮する必要がある。P2・P3は2基の柱穴が切り合っており、東へ行くに従って離れていく。若干軸をずらして建て替えが行われた可能性があると考えそれぞれの並びを図示したが、P2の北側の柱穴は浅すぎるなど疑問も残る。

〔位置〕 3B - 62 - 65・72・73。P1は一部調査区外。

〔他遺構との切り合い関係〕 SI002・003 竪穴住居跡、SK001 土坑に切られる。

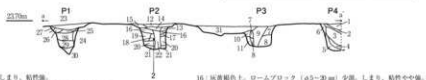
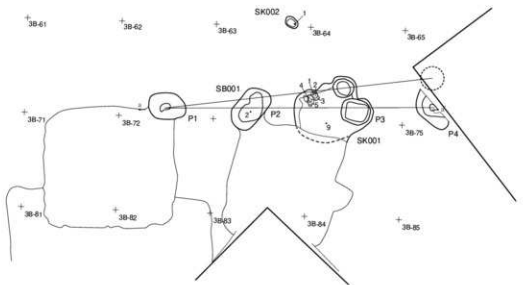
〔形状と規模〕 P1：おそらく楕円形、検出長98cm×検出幅37cm×深さ56cm。P2：南側は隅丸方形、長軸60cm×短軸52cm×深さ40cm、北側は楕円形、長軸44cm×短軸39cm×深さ16cm。P3：不整形、長軸98cm×短軸57cm×深さ52cm。P4：楕円形：長軸81cm×短軸62cm×深さ62cm。柱間はいずれも195cmとなる。

〔桁行方位〕 南側はN-88°-E。北側はN-82°-E。

〔覆土〕 4基のうちP2とP3では柱痕と裏込めが確認された。

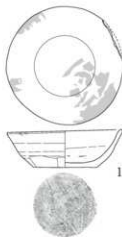
〔底面〕 P4を除いてほぼ平坦であるが、アタリ痕跡は検出されなかった。

〔遺物出土状況〕 土器は小破片のみである。P3から石製の勾玉が出土したが、古墳時代のものと考えられ



※

- 1: 黄褐色土、ロームブロック (φ10m) 散見、しまり、粘性強。
- 2: 黄褐色土、ローム柱主体、ロームブロック (φ5-20m) 多量、しまり、粘性やや弱。
- 3: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-20m) やや多、しまり、粘性強。
- 4: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-30m) 多量、しまり、粘性強。
- 5: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-30m) やや多、しまり弱。
- 6: 黄褐色土、ローム柱主体、ロームブロック (φ10-30m) 散。
- 7: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-30m) 多量、しまり、粘性強。
- 8: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-30m) 多量、しまり、粘性やや弱。
- 9: 黄褐色土、ロームブロック (φ10-20m) 中々多量、炭化物粒少量、しまりやや弱、粘性強。
- 10: 灰青褐色土、7層と比べると、ロームブロックほとんどなし、しまり強。
- 11: 灰青褐色土、8層と比べると、ロームブロックほとんどなし。
- 12: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-15m) 散見、しまり弱、粘性やや強、炭化。
- 13: 黄褐色土、ローム柱主体、しまり、粘性強。
- 14: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-10m) 散見、2層に比べると、しまりは弱い。
- 15: 黄褐色土、ローム柱主体、しまり、粘性強。
- 16: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-20m) 少量、しまり、粘性やや弱。
- 17: 黄褐色土、ローム柱主体、しまり、粘性やや弱。
- 18: 黄褐色土、ロームブロック (φ5m) 散見、しまり、粘性やや弱。
- 19: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-10m) やや多、しまりやや弱、粘性強。
- 20: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5m) 散見、しまり弱。
- 21: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-20m) やや多、しまり強。
- 22: 黄褐色土、ロームブロック (φ5-20m) 少量、炭化物粒少量、しまりやや弱。
- 23: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10m) 散見、山崩れ、SK002より新しい、炭化。
- 24: 黄褐色土、ローム柱主体、しまり、粘性強。
- 25: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-10m)、壁土、炭化物粒散見、しまり、粘性やや弱。
- 26: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-20m)、帯状やや多量、しまりやや弱。
- 27: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-20m) 少量、しまり、粘性強。
- 28: 黄褐色土、ロームブロック (φ5-15m) 少量、しまり、粘性やや弱。
- 29: 黄褐色土、ロームブロック (φ5m) 散見、しまりやや弱。
- 30: 黄褐色土、ロームほとんど見えず、しまり弱。
- 31: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-10m) 散見、1層と比べるとロームブロックは少ない。



1 SK002

0 (1/4) 10cm



2 SB-001

0 (1/2) 5cm

第16図 SB001掘立柱建物跡・出土遺物、SK001土坑、SK002土坑・出土遺物

る。伝世品もしくは国府台古墳群からの出土品であろう。地鎮のような性格の儀式が行われた痕跡か。なお、平瓦の破片がP3から1点出土しているが小破片のため実測は省略した。また、同じくP3から鉄滓が出土している。2は碧玉製勾玉で、最大長30mm、最大幅17.5mm、最大厚10mmである。孔は片側穿孔で、径は穿孔した側は4.0×3.5mm、反対側は1.5×1.5mm、重量6.7gである。小さな破損が認められるもののほぼ完形で、一部に擦痕や原石面が残る。

SK001 (第16・17図、図版8・12・13)

〔概要〕SI002 堅穴住居跡の北側に位置する。表土除去後にすぐに集積された土器が確認できたが、当初はSI002 堅穴住居跡かSB001 掘立柱建物跡に帰属するものと思われた。しかし調査が進むにつれ両者とは異なる独立した遺構であることが判明したため土坑とした。ただし底面・側面とも整形はかなり粗末で凸凹が目立ち、遺物がなければ人為的な遺構とはとても思えないような状況であった。

〔位置〕3B - 63・64・73・74。

〔他遺構との切り合い関係〕SI002 堅穴住居跡、SB001 掘立柱建物跡P2を切る。

〔形状と規模〕不整形。長軸約140cm×短軸約130cm×深さ20cm。

〔覆土〕ロームブロックの多寡で上下に分層したが、色調はほとんど差がない。SI002の覆土と類似するが、ローム粒子の流れ込みの方向で境を判断した。

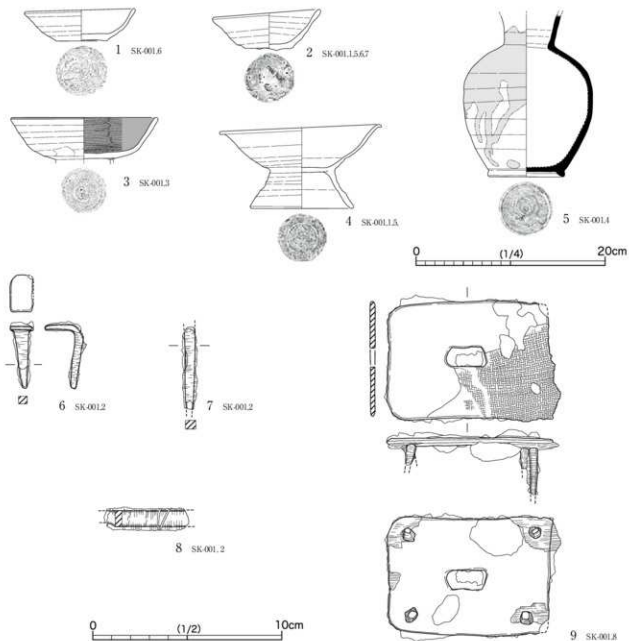
〔底面〕凸凹著しく整形した形跡は認められない。

〔遺物出土状況〕隅に土器が集積した状態で出土したほか、中心部から板状の鉄製品が出土した。

1・2は土師器杯である。1は胎土が極めて荒くザラザラしている。2は形状の歪みが著しいほかひび割れが多く粘土の付着が目立つなど、製作法はかなり雑。外面には黒斑が認められる。3・4は土師器脚高台付杯である。3は台部が欠損する。口唇部は摩耗が目立つ。4は遺存度が高いものの焼成は悪くもろい。1・2・4は使用痕跡がほとんどない。5は灰軸陶器の長頸瓶である。器面の釉薬は剝落・退色が目立つ。口縁部は欠損しており割れ口が研磨されている。高台部も部分的に打ち欠き痕が認められる。1～4までの遺物とは明らかに時期が異なっている。中の土を精査したが、遺物は発見できなかった。6～9は鉄製品である。6・7は釘と考えられる。6は残存長33.5mm、残存幅頭部12.5mm・身部4.5mm、最大厚頭部2mm・身部4mm、重量5.34gである。先端側は角棒状であるが次第に幅が広がっていき、頭部は板状を呈する。頭部下側にも木質が付着する。7は残存長44mm、残存幅5.5mm、最大厚4.5mm、重量4.40gで、木質が付着する。8は幅が途中で変化しており何らかの工具の柄と考えられる。残存長42mm、残存幅8.5mm、最大厚3.5mm、重量10.66gである。全体に木質で覆われ、さらに巻きつけるためと思われる紐の痕跡が残る。9は隅丸長方形の板状製品で、中心には隅丸台形の穴が開けられ、四隅には鉾が打ちつけられる。鉾が飛び出している側には木質が、反対側には布目が残る。鉾は右下のものが比較的良く残っているが、他は途中で折れて欠損している。板部は長辺89mm、短辺62mm、厚さ3mm、鉾は最も良く遺存しているもので残存長30mm、幅4mm、最大厚3.5mm、総重量は76.44gである。類例がほとんどない製品であるが、表側は布で覆われ裏側は板に打ちつけられていた状態を想定して実測した。一種の飾り金具のような用途が考えられるが、布目はかなり粗く違和感がある。他の土器と同時期かどうか不明である。これら鉄製品は木に打ちつけられた痕跡を残しており、何らかの木製品が存在したと思われるがその姿は明らかでない。

SK002 (第16図、図版7・12)

〔概要〕人為的な遺構とするには規模も形状も貧弱であり、感覚としてはシミのようなものである。土師



第17図 SK001 土坑出土遺物

器杯が完形で出土したため土坑扱いにしたが、浅いくぼみに落ちた土器がたまたま残存していたような状況ではないかと考えられる。

〔位置〕3B - 53・63。

〔形状と規模〕不整形円形。東西長 30cm×南北長 22cm。

〔覆土〕黒色土とローム粒・ロームブロックが斑状に混在したしまりの弱い土。人為堆積の可能性は低い。

〔底面〕凸凹で整形痕は認められない。

〔遺物出土状況〕完形の土師器杯が横位で出土した。

1は土師器杯である。灯明皿として使用されており、内面に油煙が付着するほか外面にはススが付着する。

第2節 B区の遺構と出土遺物

1 B区の概要（第5図）

B区は里見公園入口交差点の南側、バス停脇にあたる。A区北端のじゅん菜池緑地入口交差点から南へ約150m離れている。事業計画では病院正門とバス停がそれぞれ南側に移設することになっており、バス停の予定地が当該調査区にあたる。面積は約70㎡となるが既存施設との干渉を避けたほか地下埋設物が発見されたりしたため、実際にはさらに面積は狭くなった。検出された遺構は堅穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟である。国府の国庁推定地から約350mの地点でもあるせいか、密度は濃い。

2 堅穴住居跡

SI009（第18図、図版7・11）

〔概要〕B区最北端に位置する。調査区自体東西幅1.4m程度と狭く、東西壁とも調査区外となった。また攪乱が著しく、特に北壁は30cm程度しか残存していなかった。かろうじて残存していた壁際から砂の塊が検出され、カマドが存在したものと考えられる。

〔位置〕9C - 54・55・64・65・74・75。

〔他遺構との切り合い関係〕SI010 堅穴住居跡と接しており、セクションから当遺構が切っていることが分かる。

〔形状と規模〕隅丸長方形か。カマドは北側にあることを前提とすると、主軸長（南北）336cm×横軸検出長（東西）136cm×深さ36cm。

〔主軸方位〕N-11°-W。

〔覆土〕ロームブロックの混入が目立つほか、床面付近の土層は砂や焼土粒が混入している。しまりは全体に強い。短時間の間に埋め戻されたものであろう。

〔床面〕全体に柔らかく、硬化面は検出されなかった。

〔遺物出土状況〕覆土中層以上からの出土が多い。なお、灰軸陶器長頸瓶の破片がややまとまって出土しているが、胴部片で器形がとりづらく図化できなかった。

1は土師器甕である。内面に漆らしい物質が付着するがごく微量のため範囲は示さなかった。2は須恵器甕で、接合しない破片を図上復元した。底部側もケズリ痕の直上までタタキ目が残る。発色はにぶく土師器的である。在地産であろう。3は土師器甕である。外面にスガが付着する。

SI010（第18図、図版8）

〔概要〕SI009 堅穴住居跡の南側に位置する。全体の3分の2以上が東側の調査区外となる。

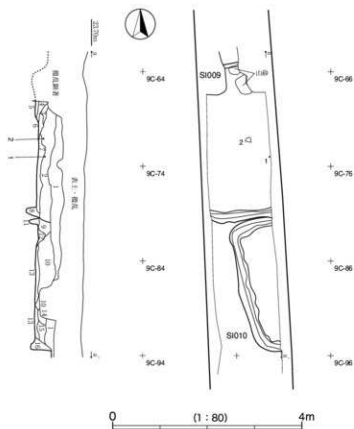
〔位置〕9C - 74・75・85。

〔他遺構との切り合い関係〕SI009 堅穴住居跡と接しており、セクションから当遺構が切られていることが分かる。

〔形状と規模〕隅丸長方形であろう。カマドの位置が不明のため東西南北でデータを示す。東西検出長98cm×南北検出長284cm×深さ44cm。

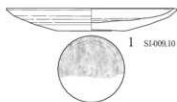
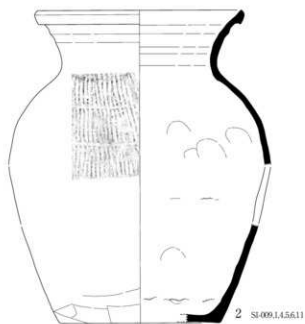
〔覆土〕床面直上にロームブロックを多量に含むしまりの弱い黒色土が堆積しており、上層側とは様相を異にする。廃絶した後若干時間をおいて埋め戻されたものか。

〔床面〕全体に柔らかく硬化面は検出されなかった。



2-2'

- 1: 黒褐色土、ロームブロック (φ5-50cm) 少量、しまり、粘状土、形成時期不明(遺構破土とはない)
- 2: 黒褐色土、ロームブロック (φ5-50cm) やや多量、焼土粒少量、しまり、粘状やや弱、1層よりやや弱い。
- 3: 黒褐色土、ロームブロックはほとんど認めない、しまり、粘状やや弱。
- 4: 灰青褐色土、ローム粒と、ロームブロック (φ10-20cm) 主体、しまり、粘状やや強。
- 5: 灰青褐色土、ローム粒主体だがロームブロックはほとんどなし、しまりやや強、断面一部?
- 6: 明黄褐色土、ローム粒を主体とし、ロームブロック (φ5-20cm)、砂粒やや多量、しまり、粘状やや弱。
- 7: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-20cm) やや多量、焼土粒少量、しまり、粘状やや強。
- 8: 明黄褐色土、ローム粒とロームブロック (φ10-20cm) 主体、しまり、粘状やや弱。
- 9: 暗褐色土、焼土、ロームブロック (φ5-10cm) 少量、しまり、粘状やや弱。
- 10: 灰青褐色土、ロームブロック (φ5-30cm) 多量、しまり、粘状やや強。
- 11: 灰青褐色土、ロームブロック (φ10-20cm) 多量、しまり弱、粘状強。
- 12: 灰褐色砂、砂粒主体、焼土多量、しまり、粘状弱。
- 13: 暗褐色土、赤色土主体で、ロームブロック (φ5-20cm) 多量、しまり、粘状弱。
- 14: 暗褐色土、ロームブロック (φ5-10cm)、焼土少量、しまり強。
- 15: 暗褐色土、ロームブロック (φ10-20cm) 少量、しまり、粘状やや強、14層よりやや弱い。
- 16: 灰青褐色土、ローム粒主体、ロームブロック (φ30cm) 下部に集中、しまり、粘状やや弱。



第18図 SI009・010住居跡、出土遺物

〔遺物出土状況〕ごく少く図化できるものは1点もない。

SI011・012・013 (第19図、図版7・11・12・13)

〔概要〕B区南側から検出されたもので、当初2軒の住居跡とみなしていたが、調査したところ3軒となった。SI011と012は土層観察及び床面で検出された周溝から新旧を判断した。調査区は東西幅2.4mと狭く、南側は事業地が狭隘かつ表土上の盛り土が厚く危険なため途中でやめている。SI013は北側の壁の立ち上がりがかろうじて捕捉できたが、通常の堅穴住居と異なり周溝はなく緩やかな立ち上がりである。なお、調査中にこれら住居跡より古い掘立柱建物跡の柱穴が検出され、SB002として扱っている。

〔位置〕10C - 05・06・14 ~ 16・25・26。

〔他遺構との切り合い関係〕SB002掘立柱建物跡を切る。

〔形状と規模〕SI011：おそらく隅丸長方形、主軸検出長254cm×横軸検出長160cm×深さ40cm。SI012：形状不明、南北検出長238cm×東西検出長94cm×深さ60cm。SI013：形状不明、南北検出長80cm×東西検出長64cm×深さ48cm。

〔主軸方位〕N-09°-W。

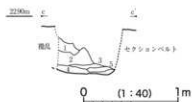
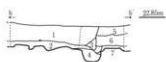
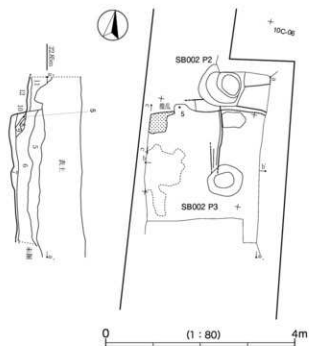
〔覆土〕SI011はロームブロックをほとんど含まないしまりの弱い土層である。SI012はロームブロックを多量に含み、焼土粒なども混入する。SI013はロームブロックを多量に含むしまりの強い土層である。ただし床面で検出された周溝はセクションでの境目と一致しない。セクション図は現場で記録したとおり掲載したが、周溝の位置と合わせると破線の部分に境が存在しなければならない。見落としたとすれば遺憾であるが、ここでは別な遺構が切り合っていた可能性を指摘しておく。

〔床面〕SI011ではカマド南側に硬化面が検出された。SI012・013では硬化面は検出されなかった。また、SI011の東壁沿いに周溝が検出されたが、住居隔の部分は床面が極めて軟弱なため輪郭が確認できず検出できなかった。なお、SI012の貼床は砂粒・焼土粒を多量に含んでいる。

〔カマド〕SI011のカマドが検出されたが、攪乱が入っており煙道は破壊されている。残存長68cm×検出幅56cm×高さ28cm。

〔遺物出土状況〕調査前は2軒とみなしていたため、SI011とSI012の区別はつけていない。なお、SI011から古墳時代後期と考えられる赤彩が施された土師器杯の破片や灰軸陶器長頸瓶の破片が出土しているが、いずれも小片のため実測しなかった。

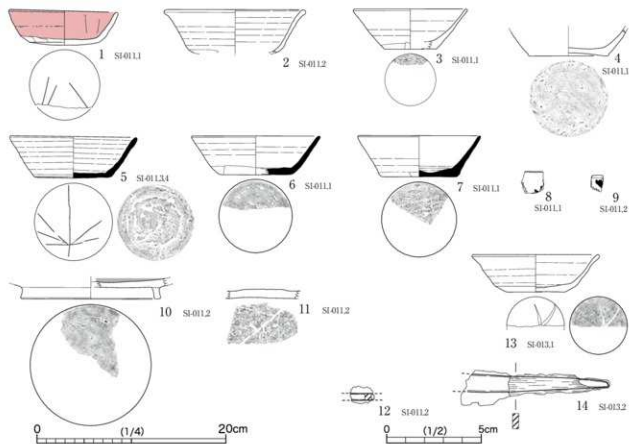
1~4は土師器杯である。1は手持ちヘラケズリ成形で、内面全体と外面上半分、底部一部に赤彩が施される。内面のナデ調整は丁寧であるが、外面は雑で指頭成形痕や輪積み痕が残る。赤彩も内面は一様・均質であるが、外面は幅にばらつきがあるほか筆ないしはハケの跡が目立つ。底面も調整は雑で、削り残しの粘土が瘤状に付着する。底面の線刻は焼成前のもの。なお、左側の線刻は先端の上側が割れ目になっているため図では末端扱いとしたが、その先に続いている可能性もある。4は回転糸切りの後調整を行っていないため底部外縁に粘土が付着する。底面全体と外面の広い範囲にススが付着する。5~7は須恵器杯である。5は内・外面に火罨が認められる。底面は回転ヘラ切りの後調整を行わず、中央部に粘土が被ったような状況となっている。放射状の線刻が施されるがこれは焼成後である。7の底面には一見線刻らしい筋が見えるが、ナデの方向と同一でありナデの痕跡であろう。8・9は墨書土器で、いずれも杯皿類の口縁部である。判読は不能である。10は土師器高台付盤である。高台は半分しか残存していなかったため貼付痕から器形を復元した。接合面には回転ヘラ切り痕が認められる。11は土師器甕の底部である。



- 2-2'
- 1: 明褐色土。砂粒主体。ロームブロック (φ5-10mm) 堆土跡混入。しまり、粘性强。
 - 2: 赤褐色土。砂粒と堆土粒の混合。しまり、粘性强。
 - 3: 灰褐色土。2層より砂粒少ない。しまり、粘性强。
 - 4: 灰黄褐色土。砂粒とローム粒主体。ロームブロック (φ5-20mm) しまり強。粘性强。
 - 5: 暗褐色土。砂粒と炭化物の混合。しまりやや強。粘性强。

a-a' b-b'

- 1: 黄褐色土。ローム粒ほとんど含まず。ロームブロック (φ5-20mm) 堆土跡混入。しまり、粘性强。
- 2: 灰褐色土。ロームブロック (φ10-50mm) 多量。しまり、粘性强。(築り床)
- 3: 暗褐色土。ロームブロック (φ5-10mm) やや多量。しまり、粘やや強。(築床)
- 4: 明黄褐色土。ローム粒主体。ロームブロック (φ10-20mm) 多量。しまり強。粘性强。(SB002P3層上)
- 5: 暗褐色土。ロームブロック (φ5-30mm) やや多量。堆土粒少量。しまり、粘やや強。
- 6: 暗褐色土。ロームブロック (φ5-30mm) やや多量。ローム粒混入に混入。堆土粒少量。しまり、粘やや強。
- 7: 灰黄褐色土。ローム粒。砂粒主体。堆土粒多量。しまり強。粘性强。(築り床)
- 8: 黄褐色土。ローム粒とロームブロック (φ10-30mm) 混入。しまり強。粘性强。
- 9: 暗褐色土。ロームブロック (φ5-20mm) やや多量。砂粒少量。しまりやや強。粘性强。
- 10: 灰褐色土。砂粒。堆土粒主体。しまりやや強。粘やや弱。
- 11: 暗褐色土。ロームブロック (φ5-30mm) やや多量。炭化物粒やや多。しまり強。粘やや強。
- 12: 灰褐色土。ローム粒少量に多く、11層より少ない。ロームブロック (φ5-10mm) やや多。しまりやや強。粘やや強。



第19図 SI011・012・013住居跡、出土遺物

木葉痕が残される。12は棒状鉄製品で、残存長12mm、残存幅3.5mm、最大厚3mm、重量0.93gである。13は土師器杯で、口縁部がやや歪んでいる。底面には焼成前にヘラ描きが施される。14は刀子の基部で木質が残る。残存長78mm、残存幅10.5mm、最大厚3mm、重量11.17gである。

3 掘立柱建物跡

SB002 (第20図、図版8)

〔概要〕表土を除去した段階では所在が確認できたのはP1のみだったため掘立柱建物跡とは認識できなかったが、SI011・012・013 竪穴住居跡の調査が進むにつれP2・P3の所在が明らかになったため設定したものである。P2は他の柱穴より規模が大きく、途中で段状になっている。P3は当初SI011の柱穴と思われたが、P2の存在が明らかになり掘立柱建物の柱穴と認識された。北東隅にあたる部分が調査区外となるため建物としての規格・規模は不明である。図ではP2・P3の位置をもとに桁行方向を南北と想定して柱穴2本を推定復元したが、梁行の柱間がかなり狭くなる。桁行の軸がもっと東へ向いているか、あるいはそれぞれ別の建物である可能性もある。

〔位置〕9C - 84・85・94、10C - 05・15。

〔他遺構との切り合い関係〕SI011・012・013 竪穴住居跡群に切られる。

〔形状と規模〕P1：楕円形、長軸98cm×短軸検出長64cm。P2：楕円形、上端径96cm×88cm、中端径52cm×50cm。P3：楕円形、径68cm～74cm。P2・P3間の柱穴間は124cm、柱間はほぼ200cmとなる。

〔桁行方位〕N-05°-W。

〔覆土〕途中で認識されたものがほとんどなのでデータは不十分であるが、下層側にロームブロックを多量に含む埋戻しと思われる土層が堆積し、上層はロームブロックの少ない黒褐色土が堆積していた。柱痕は確認できなかった。

〔底面〕全ての柱穴にアタリ痕跡が認められる。

〔遺物出土状況〕遺物は少なく小破片のみである。またP3からは遺物が出土しなかった。

1は須恵器杯で、P1から出土した。

第3節 その他の出土遺物

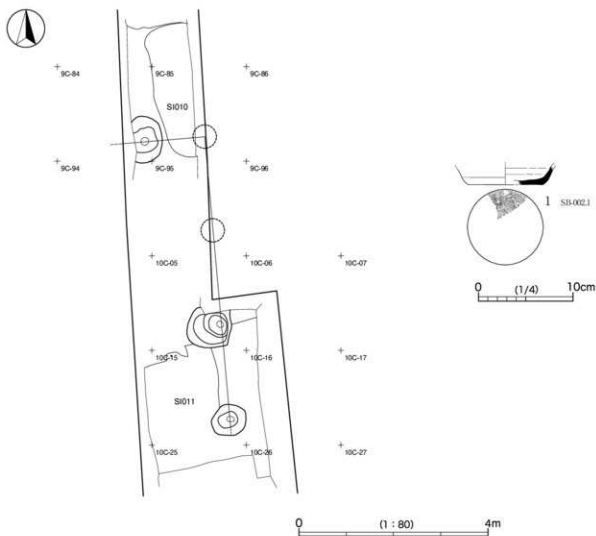
1 試掘調査出土遺物 (第21図、図版12)

県文化財課による試掘調査ではA区に2か所、B区に1か所トレンチを設定した。SI002直上、SI008付近、B区南端の3か所である。出土遺物のうち実測できたものを掲載した。

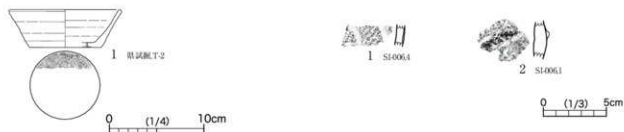
1は土師器杯である。試掘担当者からはSI002のものと報告を受けたが、すでに記したとおりこの住居跡にはSB001 掘立柱建物跡とSK001 土坑が切り合っており、これらから出土した可能性もあることからあえて帰属遺構を特定しなかった。使用痕跡はほとんどないが、外面に一部熱によると思われる荒れが認められる。

2 縄文土器 (第21図、図版12)

縄文時代の遺構は検出されず、グリッドからの遺物の出土もほとんどなかった。かろうじて時期が分かる土器片が2点出土した。



第20図 SB002掘立柱建物跡、出土遺物



第21図 試掘調査出土遺物、縄文土器

1・2はいずれも SI006 住居跡からの出土である。1は0段多条と思われる特徴的な細長い節を持つ原体を縦位施文し、縦位の浅い沈線を2本配する。右端の区画は磨り消されている。2は損傷が著しいが、斜方向に隆帯が貼り付けられている。いずれも中期後葉の加曾利E式と考えられる。

第4節 遺構内貝層の分析

第2節で述べたとおり、SI005・SI006の2軒の堅穴住居跡から貝層サンプルを採取した。サンプルは9.52、4、2、1mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を経て選別を行った。貝類の同定は上守秀明が行い、個体数の集計と計測可能な貝殻の計測を実施した。なお、貝類以外の動植物遺体は検出していない。

貝サンプルの採取法と時期

SI005の貝層ではサンプル全量14.0リットルを採取し、そのうち4.5リットルを分析対象とした。時期は土器がごく少ないため判断が難しいが、遺構の形態から7世紀末～8世紀中葉と思われる。SI006ではサンプル全量0.6リットルを採取し、すべてを分析対象とした。時期は7世紀末～8世紀初頭であろう。

分析結果

第1表のようにSI005はハマグリを主、マガキを従とし、シオフキ、オキシジミがわずかに混じる。ただしハマグリはブロック縁辺部の劣化が目立ち、遺存状況は良好なものが少なく摩耗が目立つ。逆にマガキはブロック中心部のものが多くおしなべて良好であった。そうした理由で計測個体数はハマグリよりマガキの方が多い。SI006は最小個体数でハマグリ9個、シオフキ1個である。遺存状況は一部を除いて不良である。これらは内湾の干潟で採取されたものであろう。第2表にはSI005のマガキとハマグリ of 殻長計測値をそのまま掲出した。いずれもかなりの小型種が含まれており、大きさによる選択性は希薄である。

貝の採取地としてはまず東京湾岸の干潟であることは間違いないだろう。干潟と内湾の漁獲資源は高度経済成長期以前まで極めて豊富であり、それはおそらく古代も変わらなかったと思われる。国府台地区では古墳時代後期以降集落の規模拡大が認められるが、農業生産性の向上のみならず漁獲資源の寄与も大きかったと思われる。

第1表 貝類同定結果

種名	SI005	SI006
ハマグリ	74	9
マガキ	26	
シオフキ	1	1
オキシジミ	1	
合計	102	10
分析量 (l)	4.5	0.6

第2表 貝計測値

No	マガキ殻長		ハマグリ殻長	
	SI005	SI005	SI005	SI005
1		55.00		59.79
2		79.41		56.16
3		72.56		58.76
4		103.00		68.99
5		72.46		74.16
6		85.79		85.81
7		74.98		72.31
8		41.91		64.90
9		45.68		64.37
10		35.11		67.54
11		44.22		32.12
12		33.67		31.89
13		45.68		
14		33.81		
15		53.06		
16		74.16		
17		23.57		
18		18.74		
試料数		18		12
平均		55.16		61.40
標準偏差		23.38		15.84

採種年度 番号	採種 番号	採種 時期	口径 (mm)	採種 高さ (mm)	播種 高さ (mm)	採種 時期	播種 時期	地上地産 量	最大物	内径	外径	葉	果	内径	外径	葉	果	注記	備考		
151	S8008	1上熟葉	φ7.0	-	3.3	1.00	30%	至 101702.1	果	良好	少	果	1.5	至 101702.1	果	1.5	至 101702.1	-	切手剥し	12.2%	89)
2	S8008	1上熟葉	φ2.0	-	2.9	1.00	30%	22376.4	果	良好	少	果	2.5	22376.4	果	2.5	22376.4	-	-	-	12
3	S8008	1上熟葉	φ	-	5.0	1.8	30%	25385.6	果	良好	少	果	2.5	25385.6	果	2.5	25385.6	不明	果切り・凍止赤 樹皮赤(中)	同種ヘタケズリ	16
4	S8008	1上熟葉	φ	-	6.0	1.0	100%	至 25321	果	良好	少	果	2.5	至 25321	果	2.5	至 25321	不明	不明	ナデ	3
5	S8008	1上熟葉	φ	-	2.9	0.7	100%	103706.4	果	良好	多	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	不明	不明	ナデ	5.16
6	S8008	1上熟葉	φ	-	5.0	1.2	-	103706.4	果	良好	多	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	-	-	-	7.0
7	S8008	66熟葉 高付付 葉	φ	-	-	-	-	成産377.3	果	良好	少	果	2.5	成産377.3	果	2.5	成産377.3	-	-	-	1
184	S8009	1上熟葉	φ	0.0	0.0	2.4	5.5%	103706.4	果	良好	少	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	10
2	S8009	1上熟葉	φ	0.0	0.0	3.0	30%	103706.4	果	良好	多	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	-	-	-	-
3	S8009	1上熟葉	φ	-	4.0	1.8	30%	103706.3	果	良好	多	果	2.5	103706.3	果	2.5	103706.3	不明	不明	同種ヘタケズリ	1.566.11
194	S8011	1上熟葉	φ	1.6	7.4	4.8	80%	103706.4	果	良好	少	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
2	S8011	1上熟葉	φ	0.0	-	1.6	100%	103706.4	果	良好	多	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	-	-	-	1
3	S8011	1上熟葉	φ	0.0	5.0	4.3	25%	487316.3	果	良好	多	果	2.5	487316.3	果	2.5	487316.3	不明	不明	同種ヘタケズリ	2
4	S8011	1上熟葉	φ	-	8.5	2.9	100%	103706.4	果	良好	少	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
5	S8011	1上熟葉	φ	3.5	8.2	4.5	75%	487316.1	果	良好	多	果	2.5	487316.1	果	2.5	487316.1	不明	不明	同種ヘタケズリ	3
6	S8011	1上熟葉	φ	0.0	0.0	4.1	35%	487316.6	果	良好	多	果	2.5	487316.6	果	2.5	487316.6	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
7	S8011	1上熟葉	φ	0.0	0.0	4.3	25%	487316.1	果	良好	多	果	2.5	487316.1	果	2.5	487316.1	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
8	S8011	1上熟葉	φ	-	-	-	-	103706.4	果	良好	少	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	-	-	-	1
9	S8011	1上熟葉	φ	-	-	-	-	103706.6	果	良好	少	果	2.5	103706.6	果	2.5	103706.6	-	-	-	2
10	S8011	1上熟葉	φ	0.0	0.0	2.2	10%	103706.4	果	良好	少	果	2.5	103706.4	果	2.5	103706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	2
11	S8011	1上熟葉	φ	-	-	-	-	25376.5	果	良好	多	果	2.5	25376.5	果	2.5	25376.5	不明	不明	同種ヘタケズリ	2
13	S8013	1上熟葉	φ	0.0	0.0	3.0	40%	25376.5	果	良好	多	果	2.5	25376.5	果	2.5	25376.5	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
121	S8001	1上熟葉	φ	1.7	3.4	3.4	99.5%	753706.4	果	良好	少	果	2.5	753706.4	果	2.5	753706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	0
2	S8001	1上熟葉	φ	1.5	5.0	4.3	25%	753706.6	果	良好	多	果	2.5	753706.6	果	2.5	753706.6	不明	不明	同種ヘタケズリ	1,507
3	S8001	1上熟葉	φ	1.6	-	1.6	100%	103706.6	果	良好	多	果	2.5	103706.6	果	2.5	103706.6	不明	不明	同種ヘタケズリ	3
4	S8001	1上熟葉	φ	1.7	10.9	8.9	70%	103706.6	果	良好	多	果	2.5	103706.6	果	2.5	103706.6	不明	不明	同種ヘタケズリ	0
5	S8001	66熟葉 高付付 葉	φ	-	8.1	17.2	90%	487316.1	果	良好	少	果	2.5	487316.1	果	2.5	487316.1	不明	不明	同種ヘタケズリ	1.5
195	S8002	1上熟葉	φ	1.22	6.8	4.0	59.5%	753706.6	果	良好	少	果	2.5	753706.6	果	2.5	753706.6	不明	不明	同種ヘタケズリ	4
201	S8002	1上熟葉	φ	-	8.0	12.0	100%	575.2	果	良好	少	果	2.5	575.2	果	2.5	575.2	不明	不明	同種ヘタケズリ	2
211	組込熟1上熟葉	φ	0.0	4.0	30%	-	-	753706.4	果	良好	少	果	2.5	753706.4	果	2.5	753706.4	不明	不明	同種ヘタケズリ	1
																					1.2

第3章 まとめ

第1節 遺構と遺物の時期と変遷

1 遺構と遺物の時期

今回の調査では面積に比して多くの遺構が検出された。国府に直接関わるものは確認されなかったが、国府の周辺の状況と変遷を示す資料であるといえる。ここではそれらの時期について簡単に触れておく。なお、これまで国府台遺跡出土土器の編年はいくつか公表されているが、ここでは宮内勝巳氏および松本太郎・松田礼子両氏の成果をふまえて検討したい（宮内 1983、松本・松田 1996）。ただしここで示す時期区分はあくまで当調査区において暫定的に設定したものであり、従来の成果とは特に整合性を取っていないことをお断りしておく。

I期 (SI006)

手持ちヘラケズリ成形の土師器杯は丸底でやや内傾する口縁を特徴とする。甕は頸部が断面「く」の字状を呈し、やや強く屈曲するものもある。須恵器甕は破片であるが内面同心円状の当て具痕が良く残る。全体に古墳時代後期の影響を強く残す。須恵器杯が出土していないため断定できないが、宮内編年のI期、松本・松田編年の2a期であろう。

II期 (SI004、SB001・002)

SI004-1は手持ちヘラケズリ成形の杯で、I期に比べかなり平底化が進んでいる。SI004-4の甕は緩やかな傾斜の胴部と稜線を境にはっきりと立ち上がる口縁部が特徴で、市営総合運動場地点3次調査3号住居跡において類似する須恵器甕が出土している。これらの事実から、宮内編年のII期、松本・松田編年の2b期にあたるものと考えられる。なおSB001・SB002については遺物での検証が十分とはいえないが、この遺構より新しいSI003およびSI011～SI013をIII期としたためこの時期に比定した。ただしSI003はIII期でも後半と考えられるため、SB001はIII期の前半になる可能性もある。

III期 (SI001・003・009・011～013、SB001、SK002)

当調査区の中心的な時期である。いわゆる箱形杯の盛行と甕・皿類の割合が多いことを特徴とする。SI001は遺物が少なく決め手に欠くが、SI001-1やSI011-1の手持ちヘラケズリ成形の土師器杯は、底面がやや丸底であるものの稜線はしっかりとしており器壁もII期に比べかなり直線的である。SI003では手持ちヘラケズリ成形の杯は姿を消しロクロ成形杯のみになり、あるいは画期を示しているかも知れない。箱形の形状は維持するものの底面周縁および胴部下半の調整に手持ちヘラケズリが目立つようになり、底部の小径化が始まっている。宮内編年のIII～IV期、松本・松田編年の3期に位置付けられよう。

IV期 (SI002・007・008)

土師器杯の器高はIII期と大きく変わらないが底径は口径の2分の1近くまで小径化し、器形は全体として胴部の外反の度合いが強くなる。底面は回転糸切りの後周縁を手持ちヘラケズリ調整するが、無調整の部分が増える。宮内編年のV期、松本・松田編年の4期に位置付けられる。

V期 (SK001 灰軸陶器)

遺構としては存在しないが遺物が存在するので設定した。SK001の灰軸陶器長頸瓶は、(若干磨減しているせいもあるが)高台が断面台形ながらかなり細身になっており、胴部も長胴化している。宮内及び松

本・松田編年では該当する器種がないため直接の比較はできないが、坂野和信氏による市原市稲荷台遺跡出土の灰釉陶器の編年を当てはめると、Ⅲ期新相に当たると考えられる（坂野 2003）。

Ⅵ期（SK001 土師器）

土師器杯は全体に小形化しいずれも底径が口径の半分以下となり、回転糸切り無調整となるなど技法の簡略化が目立つ。脚高高台付杯の出現も特徴の一つである。宮内編年のⅣ期、松本・松田編年の6期に位置付けられる。

簡単ではあるが大まかに分けると以上のようなようになろう。各時期の実年代であるが、Ⅰ期は7世紀末～8世紀初頭、Ⅱ期は8世紀前半～中葉、Ⅲ期は8世紀後葉～9世紀初頭、Ⅳ期は9世紀前半、Ⅴ期は9世紀後半、Ⅵ期は10世紀半ば以降に位置付けられると考えられる。

2 国府の変遷との関わり

今回の調査区からは国府を直接構成すると考えられる施設などは検出されなかった。しかし位置を考慮すると当然国府と強く関わっているはずであり、国府の変遷と密接に結びついているであろう。ここでは国府に関するこれまでの研究成果（山路 2006等）を踏まえて当調査区の変遷を概観したい。

国府の造営は7世紀末に開始されたと考えられており、現在の市営野球場の位置に国庁、その南側から須和田地区にかけて郡家が造営され始めたことされる。初期の段階では市川砂州上の市（駅家）とそこを結ぶ東西を結ぶ官道など、重要な拠点や施設は主として国府の南側に位置しており、そこと国府を結ぶ道路は早い段階から整備されたと考えられるが、国府の北側にはあまり目を向けられていなかったらしい（まだ国分寺は建立されていない）。当遺跡のⅠ期がこの時期に当たると考えられるが、SI006の出土遺物などは確かに官衙的な色彩は薄く通常の集落遺跡と大きく変わらない。その一方で短時間に一気に埋め戻されており、何らかの土木工事が近隣で行われた可能性があるが、国府造営に関わる事業であったことを示しているかもしれない。なお、遺物がほとんど出土しなかったSI005も遺構の規模や覆土の様相はSI006に類似しており（貝ブロックを形成している点も含め）、近似する時期であろう。

8世紀前半から中葉にかけて国府周辺の整備が進み、国庁の東西にも関連施設（曹司）などが造営される。B区ではSB002掘立柱建物が出現するが、全体規模が明らかではないことと国庁まで約350mという距離はかなり微妙であり、この遺構が国府に直接関係するかは判断が難しい。A区ではSI004とSB001が該当するが、壺・皿類の量が増えることや猿投産とみられる須恵器の出土など、より官衙的な様相が強くなる。一方でSB001については掘立柱建物とするには問題があり、あるいは欄列のようなものだったかも知れない。なお、SB001は先述したとおりもう少し新しくなる可能性があり、次に述べる官道に関連する遺構であることも考えられる。

その後9世紀初頭にかけて、国府が大きく変貌するとされている。第1章でも触れたが常陸へ向かう駅路が国府から北側へ延びるように造営された。国府そのものも周辺地区を含め大きく姿を変えたことが周辺の発掘調査の成果で明らかになっている。当調査区は新しい官道のすぐ脇に位置することになるが、遺構や遺物でそのことを直接示す状況は現在のところ認められない。堅穴住居ではA区でSI001、SI003が作られ、B区ではSI009・SI011～SI013が作られる。SI011～SI013では短期間のうちに堅穴住居が次々に建てられた状況が示されている。おそらく調査区外にも多数の堅穴住居跡が存在するであろう。SI003は小形の住居であるが、転用硯、灯明皿、台付甕、鋳造鉄鍋などの特殊な遺物が短時間のうちに投棄され

第4表 土器器種別・器形別重量一覧

遺構番号	土器器						須恵器・灰釉陶器						不明	遺構別計
	杯・杯蓋・盤			壺・瓶			杯・杯蓋・盤			壺・壺・瓶				
	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部		
SI001	165	10	30	0	60	0	5	10	0	0	0	0	25	303
SI002	815	115	160	45	160	155	20	5	5	0	115	295	5	1,895
SI003	810	110	125	2,650	370	30	80	45	80	220	235	410	0	5,165
SI004	290	55	145	10	170	10	20	40	5	0	560	0	0	1,305
SI005	10	0	15	30	70	0	0	0	10	0	50	0	10	195
SI006	140	60	35	545	520	10	0	5	0	0	305	0	5	1,625
SI007	160	165	315	200	440	85	15	5	15	0	290	80	15	1,785
SI008	220	175	295	45	305	20	0	20	25	0	70	0	25	1,200
SI009	145	25	70	20	200	10	5	5	25	310	670	220	0	1,705
SI010	0	0	5	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	15
SI011	440	120	420	155	1,380	110	325	15	115	5	260	0	0	3,345
SI012	15	10	0	0	25	0	5	5	0	0	15	0	0	75
SI013	70	5	20	10	50	0	5	0	0	0	15	0	0	175
SK001	670	5	10	0	10	0	0	0	0	0	15	760	5	1,475
SK002	160	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	160
SB001	40	35	5	5	0	0	5	5	0	0	0	0	0	95
SB002	0	10	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	25
既試掘 T1	40	0	30	0	70	10	0	0	0	0	0	0	0	150
既試掘 T2	55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55
既試掘 T3	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	0	0	0	35
小計	4,245	900	1,680	3,715	3,875	440	485	160	295	535	2,600	1,765		
器形別計			6,825				8,030			940			4,900	
器種別計							14,855						5,840	
総計													20,695	

た状況を示している。なお、他の遺構も含め灯明皿が多出する点はこの時期の特徴でもあり、特にSK002は使用されていた「その場」が至近であることを強く示唆する。これが儀礼か祭祀かといった具体的な指摘を行うのは難しいが、国府との強い関わりを示しているのは間違いないと思われる。

そして9世紀半ばごろまでが国府の最盛期にあたる。第13地点を含めた国府周辺域に多数の堅穴住居や掘立柱建物が作られる。当調査区のSI002・SI007・SI008が該当するが、特にSI007では鉄製品や鉄滓が多数出土したほか、羽口や鉄滓付着土器など製鉄関連遺物が出土している。数では劣るがSI008も同様の状況である。国府に関わる製鉄集団の作業空間であった可能性がある。

10世紀代以降については不明な点が多い。区画溝などが埋まり一見衰えたような様相を示しており、それは当然承平の乱(935～940年)をはじめとする東国の動乱が関与していると思われるが、一方で六所神社が成立し「府中」の地名が残るなど、国府としての機能あるいは意識は後代まで継続していたとされる。当調査区では唯一SK001土坑がこの時期に相当すると考えられるが、その性格については第2章でも触れたとおり判然としない。この土坑が国府に関わりがあるか否かを判断する材料は乏しいが、少なくとも国府周辺空間の利用法が大きく変貌したことを示しているということだけはいえる。

第2節 SK001土坑について

前項で触れたとおりSK001については判断が難しいが、周辺での類似例を基にその性格について多少推測しておく。ただし、より踏み込んだ判断を下すには資料集積が不十分であり、今後検討の余地がある。

遺跡の南側にあたる第29地点では不整形ないしは不整形の土坑が多数検出されている。出土する土器は全てほぼ同じ時期であることもあるが、中には7～9世紀代の須恵器フラスコ瓶・長頸瓶あるいは灰釉陶器長頸瓶と、10世紀以降の在産土器あるいは土師質土器の杯・皿類が同時に出土する事例も認められる(菊池・松岡・斉藤・小高・本・芝田 2002)。刀子や鎌などの金属製品が伴っているこ

ともある。こうした事例の特徴として、須恵器ないし灰軸陶器はほぼ例外なく一部が欠損していることで、特に口縁や底部が欠損している例が目立つ。これらの遺構群については土壌墓であるとするのが共通認識となっているようであり、こうした須恵器や灰軸陶器は蔵骨器であったと考えられる。また、共存する土師器類との時期が大きく異なっている点については、当然時期の異なる遺構の切り合いである可能性がまず指摘されようが、第29地点の事例では明らかに切り合っていたという事実は認められなかったようである。時期を異にして埋まった可能性もあるが、やはり調査で確認できていない。こうした状況はSK001と類似しており、この遺構の性格を考える上でヒントを与えてくれるものと思われる。SK001では写真で見ても分かるとおり完全に同時埋納である。第2章でも触れたが灰軸陶器は釉薬の退色・剥落が顕著で、長期にわたり使用されたと考えられる。いうなれば伝世品であった可能性が強く、最終的に蔵骨器として10世紀半ば以降に埋納されたと考えられよう。第29地点の土壌墓群は古墳時代から継続する墓域とされている。当調査区では1基のみ検出されただけであるが、従来国府南側に広がっていたと考えられてきた墓域が、10世紀以降北側にも広がってきた可能性を示しているといえる。

参考文献

- 滝口 宏 1974「古代・中世編 第3章 国分寺造立の発掘」『市川市史第2巻』市川市史編纂委員会
- 小林三郎・熊野正也編 1976「市川市川博物館研究調査報告第三冊 法皇塚古墳」市川市川博物館
- 市川市教育委員会編 1979「下能の国府」『市川一市民談本〔改訂版〕一』市川市教育委員会
- 桑原 謙・宮内勝巳 1981「市営総合運動場内遺跡」『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』市川市教育委員会
- 堀越正行・佐々木和博 1981「国録法皇塚古墳」市川市川博物館
- 市川市川博物館編 1981「収蔵品図録1」市川市川博物館
- 宮内勝巳 1983「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』市川市川考古博物館・史館同人
- 山口典子・田形孝一他 1990「市川市新山遺跡 一北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ一」財団法人千葉県文化財センター
- 齊藤忠昭 1991「国府台遺跡」『平成2年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告』市川市教育委員会
- 宮内勝巳 1992「平成3年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告 須和田遺跡第6地点」市川市教育委員会
- 山路直充 1992「下能国井上駅について（上）」『平成3年度市川市川考古博物館年報—第20号—』市川市川考古博物館
- 松本太郎 1996a「国府台遺跡第3地点」『平成7年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
- 松本太郎 1996b「国分台の遺跡」『平成7年度市川市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 松本太郎・松田礼子他 1996「平成7年度市川市埋蔵文化財調査・研究報告 市川市出土遺物の分析—古代の鉄・土器について—」市川市教育委員会
- 山路直充 1997「下能国府における主要道路」『平成9年度企画展 古代の道と旅』千葉県立房総風土記の丘
- 山路直充・湯浅治久・池田真由美 1997「国府台田所在の六所神社について—古代から近代までの展望—」『市川市川考古博物館研究紀要第1号』市川市川考古博物館
- 山路直充 1998「下能国府における主要道路（補遺）」『市川市川考古博物館研究紀要第2号』市川市川考古博物館
- 松本太郎編 1999「国府台遺跡」『平成10年度市川市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 及川 穰・松本太郎 2000「国府台遺跡」『平成11年度市川市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会

- 田島 新 2001『市川市国府台遺跡第13地点—国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書—』財団法人千葉県文化財センター
- 松本太郎・松田礼子他 2001『千葉県市川市下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書—』市川市教育委員会
- 菊池 真・松岡有希子・斉藤一真・小高敬寛・本 敦子・芝田英行 2002『千葉県市川市真間国府台遺跡—第29地点発掘調査報告書—』国府台遺跡第29地点調査会
- 坂野和信 2003『平安時代施軸陶器の編年』『市原市稲荷台遺跡』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター
- 千野原靖方 2004『東葛の中世城郭』岩書房出版
- 寺村光晴・胸見和夫・禿 雅子・見留武士編 2004『下総国府台 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第1～4次発掘調査報告—下総国府跡の発掘調査—』和洋学園
- 堀越正行 2006『市川の地形のなりたち』『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 領塚正浩 2006『市川最古の住民たち』『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 松本太郎 2006『卑弥呼の頃の市川』『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 山路直充 2006『手児奈の風景』『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 湯浅治久 2006『豪族千葉氏と法華経寺』『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 栗田剛久 2008『市川市北下遺跡瓦窯跡発掘調査概報』財団法人千葉県教育振興財団
- 曾根俊雄・松本太郎 2008『国府台』『平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 山路直充 2010『「京」墨書土器と国府城』『平成21年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』財団法人千葉県教育振興財団

写 真 图 版





A区調査前風景



B区調査前風景



下層セクション

A区遺構検出状況



SI001



SI002





SI003カマド及び
遺物出土状況



SI004



SI005



SI005
貝ブロック検出状況





SI006



SI007



SI008

SI009・SI010



SI011・SI012・SI013・SB002



SK002





SK001



SK001・SB001切り合い状況



SK001遺物出土状況



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

瓦



SI003-19



SI007-17



SI007-16

墨書土器



SI002-8



SI002-9



SI002-10



SI002-11



SI002-7



SI007-6



SI007-8



SI007-9



SI011-8



SI011-9

金屬製品



SI002-14



SI004-7



SI007-26



SI007-25



SI007-23



SI007-24



SI007-21



SI007-20



SI007-19



SI007-18



SI007-22



SI011-12



SI013-14



SK001-8



SK001-6



SK001-7

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいいせきだい13ちてん(3)							
書名	市川市国府台遺跡第13地点(3)							
副書名	地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第665集							
編著者名	安井 健一							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2					TEL. 043(424)4848		
発行年月日	西暦2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国府台遺跡 第13地点(3)	千葉県市川市国府台 一丁目2-105ほか	12203	003(3)	35度 44分 50秒	139度 54分 17秒	20101001 ～ 20101029	512	道路建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国府台遺跡 第13地点(3)	包蔵地 集落跡 生産遺跡	縄文 古墳 奈良・平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑	14軒 2棟 2基	縄文土器(中期) 土師器、碧玉製勾玉 土師器・須恵器(8 世紀から10世紀)、 灰輪陶器、鉄製品(刀 子、釘、飾り金具?、 铸造鉄鍋)、支脚、羽 口、鉄滓、瓦	勾玉は8世紀代と考えられる 掘立柱建物跡の柱穴から出土 した。 8世紀初頭と考えられる竪穴 住居跡から铸造の鉄製鍋が出 土した。 10世紀中葉以降の墓と考えら れる土坑から土器の集積と板 状の鉄製品が出土した。		
要約	国府台遺跡は江戸川下流の左岸、国府台の台地上に位置し、下総国府推定地とされている。当調査区は国府国庁推定地より約350～500m北方にあたり、常陸国への官道沿いに位置すると考えられる。検出された遺構は竪穴住居跡や掘立柱建物であるが、直接国府を構成する施設であることを示す根拠は得られなかった。遺構は国府の造営とほぼ同時期の7世紀末より営まれ始めるが、当初は国府との関連は特にうかがえない。しかし、8世紀以降9世紀半ばにかけて国府城の拡大にあわせて、掘立柱建物が出現し、竪穴住居から国府との関連をうかがわせる遺物が出土するようになる。また、鉄製品とともに製鉄関連遺物を多数出土する住居も出現し、製鉄作業を行う場であったと考えられる。10世紀以降住居は消滅するが墓塚と考えられる土坑が検出され、国府周辺の空間の利用法が変化したことを推測させる。							

千葉県教育振興財団調査報告第 665 集

市川市国府台遺跡第 13 地点 (3)

—地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書—

平成 23 年 3 月 18 日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文 化 財 セ ン タ ー
発 行	千 葉 県 県 土 整 備 部 千葉県中央区市場町 1 - 1
	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡 809 番地の 2
印 刷	株式会社エリート情報社 [印刷出版局] 成田市東和田 415 - 10
